第２章 宇治市の維持向上すべき歴史的風致

１．遊覧と参詣　宇治川河畔の歴史的風致

宇治は平安京遷都とともに、都の南郊という地の利と宇治川を中心とする風光明媚な景観が貴族に愛され、別業(別邸)が建てられるようになる。その始まりは『日本後記』弘仁５年（814）条にみえる桓武天皇皇子明日香親王の宇治別業であり、この後、皇族・貴族によって別業が建てられていく中で、宇治の個性が形成されていった。この頃の記録を見ると、例えば『日本紀略』天慶９年（946）条にみえる朱雀上皇の宇治院御行幸や翌年の陽成上皇の御行幸では、宇治の景色を楽しみながら近辺の山野で遊猟が行われている。また『蜻蛉日記』の作者藤原道綱母は、安和元年（968）やその後の奈良の初瀬参詣の途次に宇治を訪れ、宇治川の網代や鵜飼などの様子を興味深く見学している。この頃、宇治川の網代は平安宮清涼殿の障子に描かれ、紀貫之が「落積る　もみじ葉みれば　百年の　秋のとまりは　網代なりけり」と詠じたように、宇治の紅葉と宇治川の網代は対となる景色として平安貴族の美意識にかなうものであった。

これらの点を踏まえると、彼らの宇治への興味は、単に美しい自然景観のみにあるのではなく、そこで営まれる都にはない田舎びた土地の風物を含みこんだ風情であったといえる。そして網代や紅葉のみならず、鵜飼、柴舟、水車、柳など

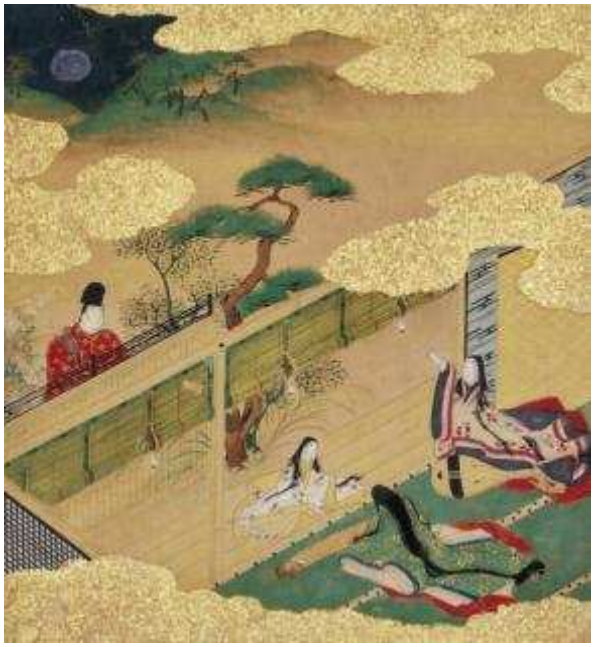


図２-１　源氏物語宇治十帖「橋姫」
『源氏絵鑑帖』伝土佐光則画（江戸初期）

図２-２　源氏物語宇治十帖「浮舟」
『源氏絵鑑帖』伝土佐光則画（江戸初期）

宇治川の風景は、桃山時代に至り「柳橋水車」として工芸品を飾る風雅な意匠の一つとなっていく。

平安時代中期に紫式部によって書かれた『源氏物語』の中の宇治が、貴族の別邸が建てられ王朝文化が華開いた場所でありつつも、かたや寂しげで鄙びた土地として描かれるのは、この土地が彼らの審美眼にかなう四季折々の自然美を持ちつつ、都でもなく鄙でもない境界的空間として意識されていたためである。そしてこの都鄙中間的な土地柄が持ち合わせた、政治の中心である都には求め得ない、ある種の自由さが、貴族の別業文化を一層醸成させ、後世にわたって宇治の個性を育てていく原点となった。

宇治での別業造営が大きく発展する契機になったのは、平安時代中期、時の権力者藤原道長が宇治川畔に別業を求めたことによる（長徳４年（998)、『花鳥余情』)。以来、宇治は藤原一門の別業の地として多くの邸宅や仏堂が建てられ､都市的発展を遂げることとなる。道長の自筆日記『御堂関白記』には、宇治別業での遊宴の様子が伝えられている。彼が宇治を訪れるのは、社寺参詣の途次を除くと、季節としては夏と秋が多かった。宇治別業での遊宴には、多くの貴族たちが招かれた。また妻の倫子が同行することもしばしばであった。川岸に建てられた別業寝殿では詩歌管弦の宴が開かれ、夏には涼しさを求めて招いた貴族たちと川遊びをし、秋には舟から岸辺の紅葉を愛でて遊んだ。

この宇治別業は、道長の没後にその子頼通に伝えられ、永承７年（1052）に寺院へと改修された（『扶桑略記』)。これが平等院である。仏師定朝作の丈六阿弥陀如来坐像を本尊とし、阿弥陀如来の宮殿である極楽の宝楼閣を模した鳳凰堂が建てられたのは翌年のことである。『扶桑略記』康平４年（1061）条に伝えられる平等院多宝塔供養願文には、平等院に「極楽之儀を移す」とあり、都で流行した童謡に「極楽いぶかしくば　宇治の御寺をうやまへ」とあるように、平等院は当時の末法思想の流布を背景として、現世の極楽浄土として広く信仰を集めることとなる。宇治川対岸に地主神菟道稚郎子命を祀る離宮社（現在の宇治神社・宇治上神社）が整備されたのも、ちょうどこの頃であると、国宝宇治上神社本殿の科学的年代分析から解明されており、藤原氏によって平等院造営に併せて離宮社も造営されたことが指摘されている。宇治川を挟んで、東岸にこの世の守り神である離宮社、西岸に来世を託す平等院が対置され、あたかも浄土教の説く此岸から彼岸への連続性を表現するかのように､祈りの空間が宇治の自然景観と重なりながら形成されることとなった。

平等院鳳凰堂（国宝・世界遺産）

平等院での法会の様子はさまざまに記録されているが、特に有名なものは、頼通の娘で後冷泉天皇皇后となった四条宮寛子が、元永元年（1118）に催した十種供養がある（『中右記』）。この時、鳳凰堂は色とりどりの幡や幕で飾られ、池中・島上は隙間なく作り物の水鳥や桜や楓や蓮で埋め尽くされ、龍頭鷁首の楽船が浮かべられた。池上に作られた舞台では華麗な菩薩舞が舞われ、まさにこの世の極楽浄土の光景を彼女達は池岸の御所から観覧した。平等院造営に合わせて、平等院西側の現在の市街地辺りには、小河殿や小松殿などの別業が集中して建てられ華やかな景観が造られていった。貴族の生活舞台である政治都市平安京から離れ、つかの間の自由と信仰とを獲得できる特別の場所としての別業の文化が、宇治ならではの風景と相まって華開いていった。小河殿を訪れた藤原宗忠が「田畝渺々　河水茫々　眺望無極　幽奇勝絶」と宇治の風景に感激したのは、まさにこの頃であった（『中右記』長承元年（1132））。また 12 世紀初頭には、平等院の南側の山里に白川金色院が四条宮寛子によって創建され、別業の地宇治に空間的な広がりが与えられた。

源平の争乱を乗り越え鎌倉時代になると、時代の動向に合わせ次第に別業の地、宇治の華やかさは記録から薄れていく。歌人として著名な藤原定家が平等院の荒廃を嘆いたのは寛喜３年（1231）夏８月、春日社参詣の帰りのことである（『明月記』）。しかし、平安貴族が見出した宇治川の風景美は都近郊の代表的な風情として定着し、決して安定した世とは言えない中世期であっても人々の来訪を促していく。たとえば、定家が嘆いたその年、九条道家が宇治に遊覧し宇治川の網代を見物したことが記録され（『明月記』）、宝治２年（1248）秋には後嵯峨上皇が宇治川を遊覧し紅葉、柴舟、網代を見物している（『増鏡』）。宇治の町を灰燼に帰した南北朝の兵乱をまたぎ、室町時代では応永８年（1401）秋に３代将軍足利義満が宇治に遊覧し、名産の松茸を賞味した（『迎陽記』）。寛正６年（1465）秋には５代将軍足利義政が宇治に逗留遊覧し、平等院前より舟で帰洛している（『蔭涼軒日録』）。

この頃、新たな宇治川の風物として夏の蛍が加わるようになる。東福寺の僧の日記『碧山日録』には、夏になると宇治橋の上や船上に貴賤の人々が群れ集い、川面を乱舞する蛍を観賞する様子が記されている（寛正元年（1460））。宇治川の蛍は、このあたりから宇治の風物詩として定着し、江戸時代から明治にかけて全国から多くの観覧者が訪れ、夏の夜の蛍狩りを楽しんだ。河川環境の変化で、昭和に入ると蛍は宇治川からいなくなり、現在は一部の支流に生息するのみとなった。

図２-３　宇治川の蛍狩り『都名所図会』（江戸後期）

平安貴族に愛された宇治の川霧

宇治の紅葉（興聖寺の琴坂：府指定名勝）

参詣客で賑わう三室戸寺（本堂：府指定文化財）

参詣客で賑わう宇治上神社（拝殿：国宝・世界遺産）

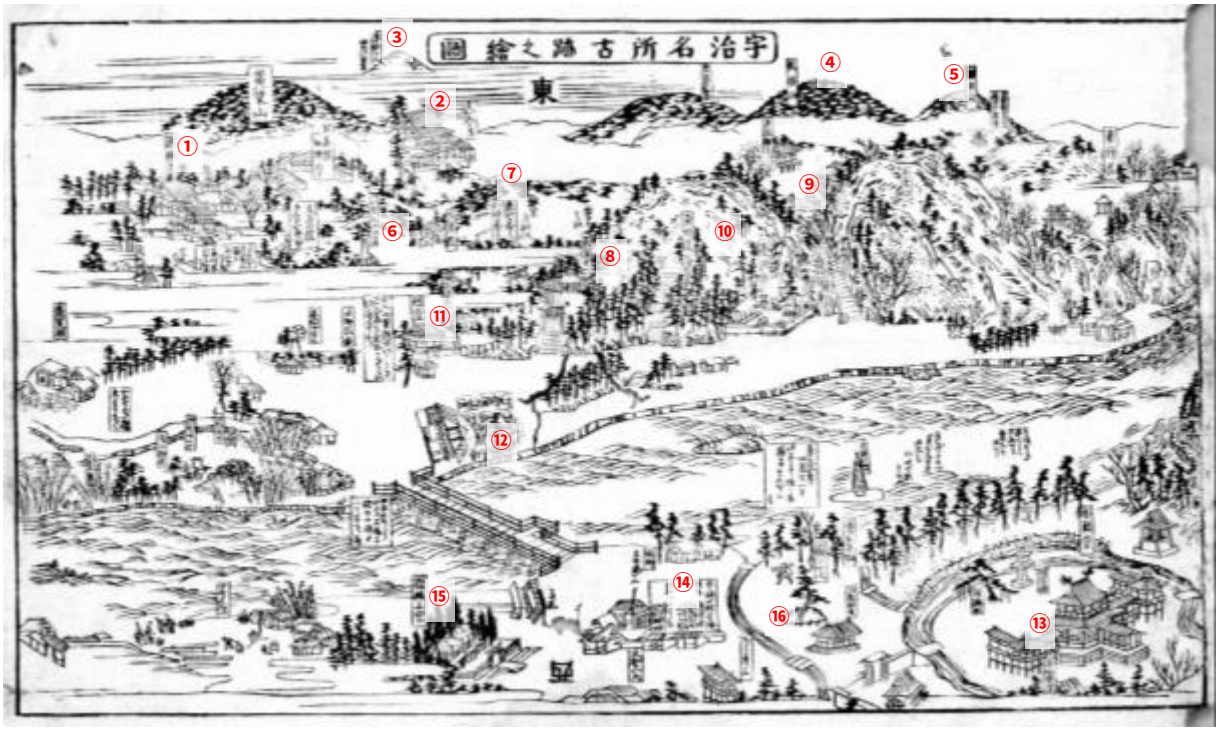
近畿地方の中世期は、庶民の西国三十三所観音霊場巡礼が盛んになった時代であった。宇治では三室戸寺が十番札所にあたり、多くの参詣者が訪れるようになる。この霊場巡礼者が奉納した巡礼札は、応仁２年（1468）銘を最古に平等院にも幾枚も残されており、観音巡礼に併せて宇治川畔の社寺を訪ねていたことが分かる。三室戸寺には、現在も多くの観光客や西国三十三所の巡拝者が訪れている。

江戸時代は社会の安定とともに旅の大衆化が促進された時代であり、これに呼応して各地に「名所」が成立していった時代でもある。これらに併せて、名所案内記や名所絵図が出版された。宇治に関係する早い例として『京童』（明暦４年（1658））、宇治十二景を載せる『京羽二重』（貞享２年（1685））、文人たちに影響を与えた貝原益軒の『和州巡覧記』（元禄９年（1696））、代表格の『都名所図会』（安永９年（1780））、多色刷の『宇治川両岸一覧』(文久３年（1863）)を始め多数の名所案内記をあげることができ、『宇治名所古跡之絵図』（江戸後期）を始め幾枚もの宇治名所図を知ることができる。江戸時代を通じて繰り返しこれらが出版され続けたのは、宇治が全国に名をはせる名所として定着していたことを示している。

これら宇治の名所図は北端を黄檗山萬福寺、南端を平等院周辺とし、宇治川を中心とする構成が一般的である。描かれる名所古跡は、宇治川河畔の平等院や離宮社（宇治神社・宇治上神社）、興聖寺を始めとする社寺仏閣などの他に、宇治橋や『源氏物語』の宇治十帖に関する古跡が登場する。そもそも『源氏物語』自体は物語であり、ゆかりの場所が具体

図２-４　『宇治名所図』（江戸後期）

江戸時代における宇治の代表的な名所が描かれたこの屏風絵には、多くの人で賑わう様子が描かれている。
左上の寺は萬福寺、中ほどに宇治橋、右下が平等院である。また舟遊び、芝舟、覆下茶園、木綿さらし、水車などが合わせて描かれている。



①	萬福寺	②	三室戸寺	③	喜撰山	④	仏徳山
⑤	朝日山	⑥	かげろうの石	⑦	離宮上ノ社	⑧	離宮下ノ社
⑨	興聖寺	⑩	恵心院	⑪	橋寺	⑫	通圓茶屋
⑬	平等院鳳凰堂	⑭	宇治十帖古跡	⑮	橋姫之宮	⑯	扇ノ芝

図２-５　『宇治名所古跡之絵図』（江戸後期）　※数字は加筆

的に存在するわけではないが、江戸期に古典が庶民に親しまれるにつれて、「橋姫神社」などの古社寺や「かげろう石」のような平安時代後期の線刻仏が、「宇治十帖古跡」に仮託され名所化されていった。また『平家物語』の古跡として、以仁王の令旨を奉じて挙兵した源頼政の自刃の地である平等院境内の「扇芝」なども、歴史上の事件にかかわる名所として整備され、人々が訪れている。『源氏物語』や『平家物語』の古跡は、明治以降には新たに石碑などの建立がされて顕彰が進み、現在も多くの人が訪れている。更に「亀石」などの宇治川中の奇岩奇石も江戸時代から名所に加わり、現在、宇治の観光客が一般的に訪れる宇治川周辺の観光案内図とほぼ同じ内容の記載がされるようになった。夏の蛍狩りや名物の鮎取りなどは宇治川の風物詩として賑わい、渇水期には宇治川の奇石を見ようと「京摂の騒人墨客」が引きも切らない有様であったという（『雲錦随筆』）。

江戸時代初めには伊勢参宮や西国巡礼、京・大和の社寺巡りなどの参拝者が、その途次に宇治を訪れたことは、巡礼札や鳳凰堂の落書きなどから分かる。また多くの京・大坂の人たちが四季折々に宇治を訪れ、宇治川沿いや更に奥の白川まで遊覧していたことも、名所案内記などから知ることができる。宇治が来訪者で賑わうとともに、川岸には茶屋（旅館）や料亭あるいは舟宿などが建てられ、名産の鮎や鰻などの川魚料理が振る舞われた。

図２-６　蜻蛉石『拾遺都名所図会』（江戸後期）

宇治十帖古跡かげろう石（平安後期）

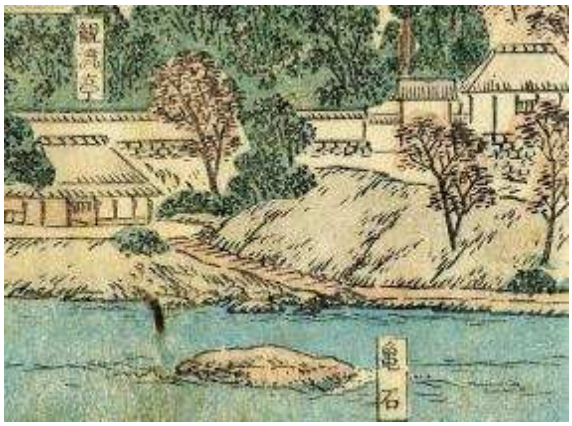


図２-７　亀石『宇治川両岸一覧』（江戸後期）

亀　石

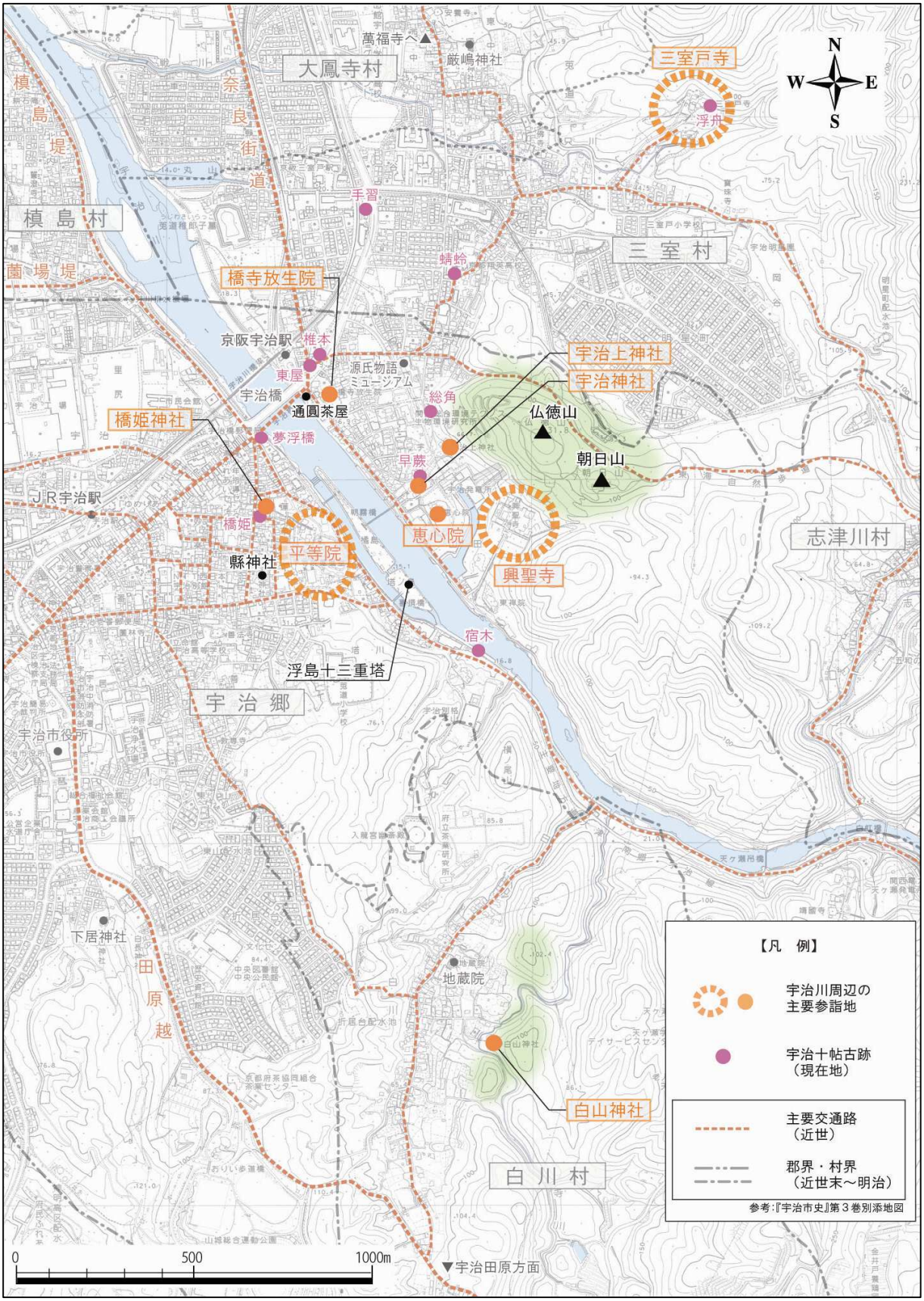


図２-８　宇治川沿いの主要参詣地と散策ルート

延享元年（1744）の「宇治郷明細帳」を見ると、宇治の人口は 3,100 人ほど、人家 730 軒ほどであるのに対して、造酒屋３軒、小売りの請酒屋 13 軒、茶屋・巡礼茶屋 19 軒が記録される。京都と比較すると、請酒屋数は人口比で京都の５倍を超え、当時の宇治の旅館や料亭の賑わいの一端を知ることができる。この頃、宇治で有名な旅館として菊屋があった。この旅館は名所図にも描かれており、現在もその一部が喫茶店として利用され人々が訪れている。

これら川岸に建つ旅館の様子は、写実的に描かれた『宇治川両岸一覧』に見ることができ、参拝客や宴会客で賑わう宇治川畔の様子は『宇治名所図』に描かれている。川岸の旅館や料亭は､明治以降になると宇治橋近くだけではなく上流部にも建てられるようになり、今もこれら料亭や旅館では鮎や鰻などの川魚料理が提供されている。

宇治橋西詰の通圓茶屋は、奈良街道を往来する人々に茶をふるまう所として広く知られていた。江戸時代の『雍州府誌』などによると、始まりは平安末期と伝え、橋の袂に庵を結んで茶をふるまったのが最初という。近世になって、その跡に茶店を構え店内に一休禅師作の通圓法師坐像を置いたところから､「通圓茶屋」と呼ばれるようになった。豊臣秀吉が伏見在城の時、茶に使う水を宇治橋三の間から汲み上げる役を与えられたといわれ、千利休作と伝えられる釣瓶が保管されている。現在の建物は、木造二階建で一階部分は道に面して大きく庇を出し、店として利用されている。建物自体は、寛文 12 年(1672)の大破後に建てられたとされ、明治期に西側に二階部分が付設された以外は当時の姿を現在に受け継いでおり、江戸期の茶店建築として重要である。通圓茶屋では、今も江戸期の『宇治川両岸一覧』に描かれた賑わいを見ることができる。

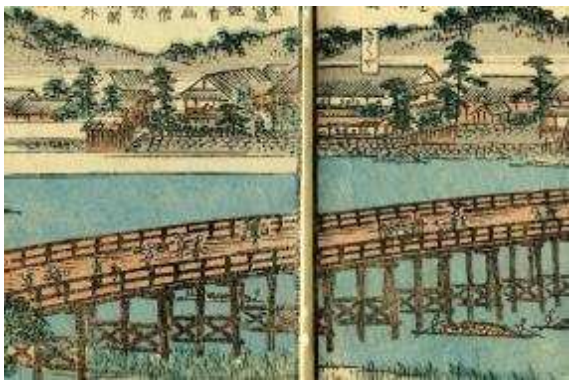


図２-９　菊屋『宇治川両岸一覧』（江戸後期）

現在は喫茶店として利用される旧菊屋万碧楼

図２-10　通圓茶屋『宇治川両岸一覧』(江戸後期)

昔の風情を伝える通圓茶屋

また宇治川の川船は薪や物資などの運搬によく利用されていたが、宇治遊覧の重要な要素でもあった。江戸期の名所図などには、船で宇治川を遊覧する様子や夏の蛍狩りに船を出して愛でる姿が描かれている。近年では蛍狩りはなくなったが、宇治川の船遊覧は今も主に春から夏にかけて、乗り合いの川船で多くの観光客が楽しんでいる。

このように宇治川とその河畔には、平安時代から変わらない山紫水明の宇治川の自然美を愛で、平等院を始めとする古社寺を詣で、『源氏物語』などにゆかりのある古跡を巡りながら遊覧し、あるいは船で遊ぶ人々の風景を今も見ることができる。

図２-11　船遊覧と柴舟『宇治名所図』（江戸後期）

現在の船遊覧と浮島十三重塔（重要文化財）

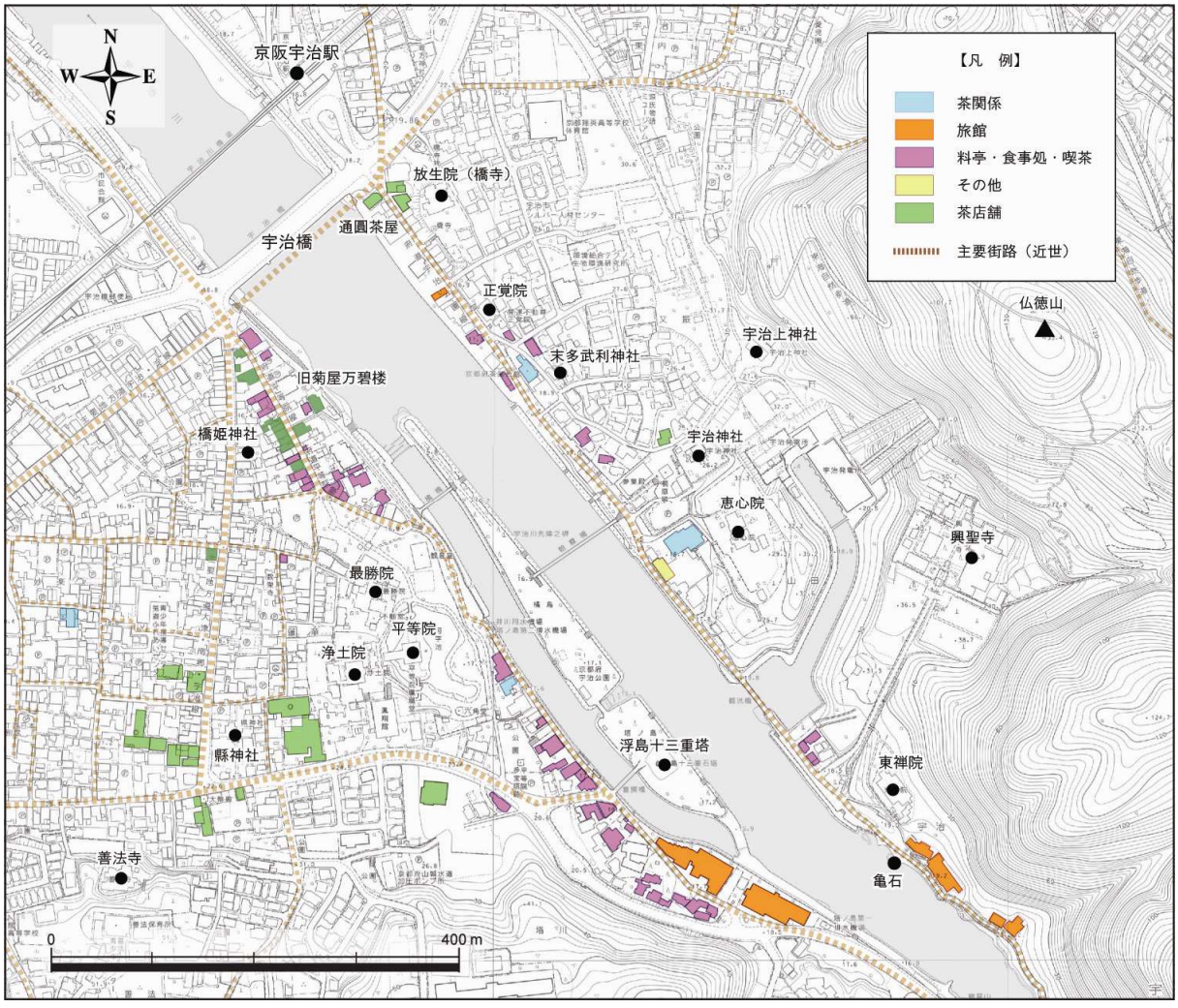


図２-12　宇治川沿いの茶業関連・飲食店・旅館等の施設分布図

２．茶どころ宇治の歴史的風致

２-１　覆下茶園の歴史的風致

宇治の茶園の多くは、茶摘み前になると上に覆いが施され、茶園をすっぽりと隠してしまう「オイシタ（覆下）」と呼ばれる栽培方法である。現在、市内の約９割の茶園が覆下であり、覆いをしない露天園は１割にも満たない。この覆下茶園が、露天園を主体とする茶産地と違う宇治の茶園風景を作り出しており、この独特で手間のかかる栽培方法によって、宇治茶は天下にその名声をはせてきた。覆下茶園は宇治茶の原点といえるものである。

宇治茶の覆下栽培は、新芽が育つ４月頃に茶園に覆いを施して日光を遮ることで、茶葉の渋み成分であるタンニン生成を抑え旨味成分テアニン生成を促進させる方法で、宇治茶伝統の碾茶（抹茶の原料）や玉露などの高級茶に製茶される。これに対して、露天園は主に煎茶用の茶葉を栽培することとなる。覆下は、本来丸太杭と竹で棚を作り、その上にヨシズを広げてワラを敷くものであり「本簀（ほんず）」と呼ばれる。現在は効率化の中で、化学繊維製の黒い寒冷紗の覆いが普及したが、伝統的な本簀も全体の１割ほどで継承されている。

覆下栽培の初期の様子を知る史料に、安土桃山時代のイエズス会宣教師ジョアン・ロドリゲスが書き残した『日本教会史』がある。この中に宇治では茶園に「棚をつくり、葦か藁かの蓆で全部をかこう」という記述があり、現在の覆下栽培の史料初見となっている。ロドリゲスは、覆下の目的は繊細な新芽を霜害から防ぐためと記している。確かに遅霜は茶葉の大敵であり、覆いによる霜害対策は説得力があるが、現在の状況を踏まえると、この覆いによる味の変化を経験的に知ることにより、宇治では品質向上を主目的として覆下栽培が改良されつつ継承されてきたと考えられる。

宇治の茶摘み景観（寒冷紗の覆下茶園）

茶摘みは「夏も近づく八十八夜」と歌われるように、新芽が成長する初夏５月から６月頃に行われる。また上質な茶を作るために新芽のみを選ぶため、手摘みが現在も多い。茶摘みの時期になると、多くの「お茶摘みさん」が集まり覆下の中で茶摘みに勤しむ。宇治が慌ただしくも活気づく季節である。

この独特な覆下茶園の景観は、宇治を代表する初夏の風物詩として、古くから多くの人々の興味を引いたことが知られる。安土桃山時代には、天正 12 年（1584）に吉田兼見が人々を連れて初めて宇治の茶摘み見物に出かけたと記しており、天正 15 年（1587）にも「宇治之茶最中也、為見物罷越」と宇治に再び出かけている（『兼見卿記』）。奈良からは興福寺の僧達が見物に訪れている（『多聞院日記』）。また天正 19 年（1591）には豊臣秀吉も宇治へ茶摘み見物に出かけていることがみえ(『言経卿記』)、当時、宇治の茶摘み見物が一種の流行であった。

図２-13　覆下茶園と茶摘み『宇治名所図』（江戸後期）

江戸時代になると茶どころとして知られた宇治は、覆下茶園自体が「名所」となり名所案内記や名所図などに紹介され観光の対象となっていた。たとえば安永９年(1780)に出版されて後の名所図会ブームの先駆けとなった『都名所図会』には、「都の巽、宇治の里は茶の名産にして、高貴の調進年毎の例ありて、製法他境にならびなく、山吹ちり、卯の花咲そむる頃、茶摘とて此里のしづの女、白き手拭をいたゞき、赤き前だれを腰に翻して飜して、茶園に入り、声おかしく、ひなびたる歌諷ひて興じたる」とあって、茶摘みをする女性たちの様子が名産宇治茶よりも大きく扱われている。

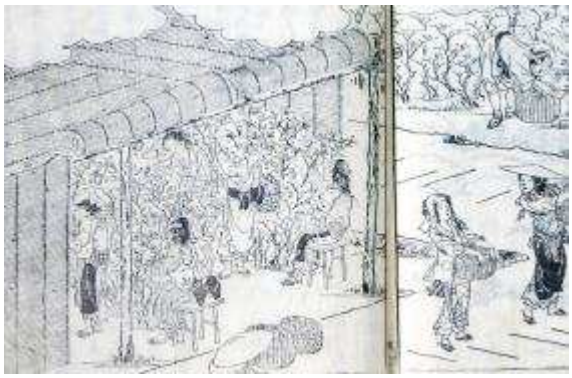


図２-14　覆下茶園と茶摘み『都名所図会』（江戸後期）

覆下茶園と茶摘み（大正期）

本簀覆下茶園と茶摘み

現在、宇治市内の茶園は、宇治地区、白川地区、木幡地区、小倉地区などの農地や山間部を中心に全市域に広がっており、宇治川沿いに細長く展開したり市街地の宅地の間に小規模に点在したりする状況も見て取れる。

近世の絵図を見ると、宇治地区では北側の平野部と街中の住宅背後に集中して茶園が認められる。江戸時代の宇治の町は北村季吟の『菟芸泥赴』（慶安元年（1648））に「宇治此頃は茶の所となりていずこもいずこも皆園也」と言わしめたように、茶園の中に町が浮かんでいる、といっても過言ではない風景が広がっていた。なお当時、茶園は「園畑」あるいは「園」と呼ばれることが多かった。

昭和に入っても、宇治の市街地には江戸期以来の茶園が維持され続けていた。市街地内の茶園が急速に減少したのは、宇治が住宅地として着目され開発が進んだ昭和 40 年頃からである。現在も僅かではあるが市街地内に茶園は維持され、かつての景観を見ることができる。また室町時代に成立した宇治七名園の一つの奥山園が、市街地南の台地上で今も茶栽培を行っている。

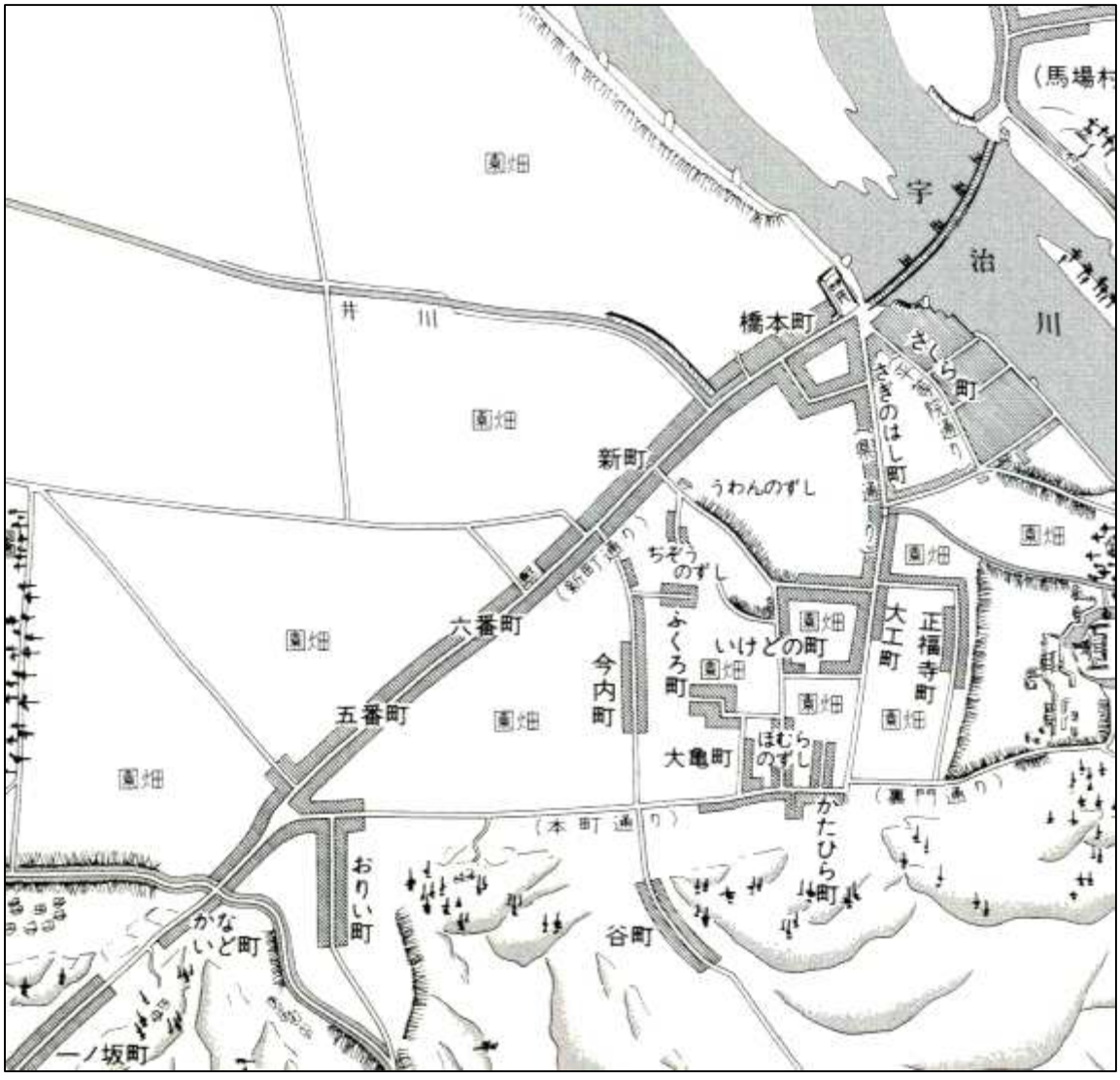


図２-15　江戸前期の宇治郷
（『宇治郷絵図』の書き起し。宇治では茶園を「園畑」・「園」と呼んでいた）

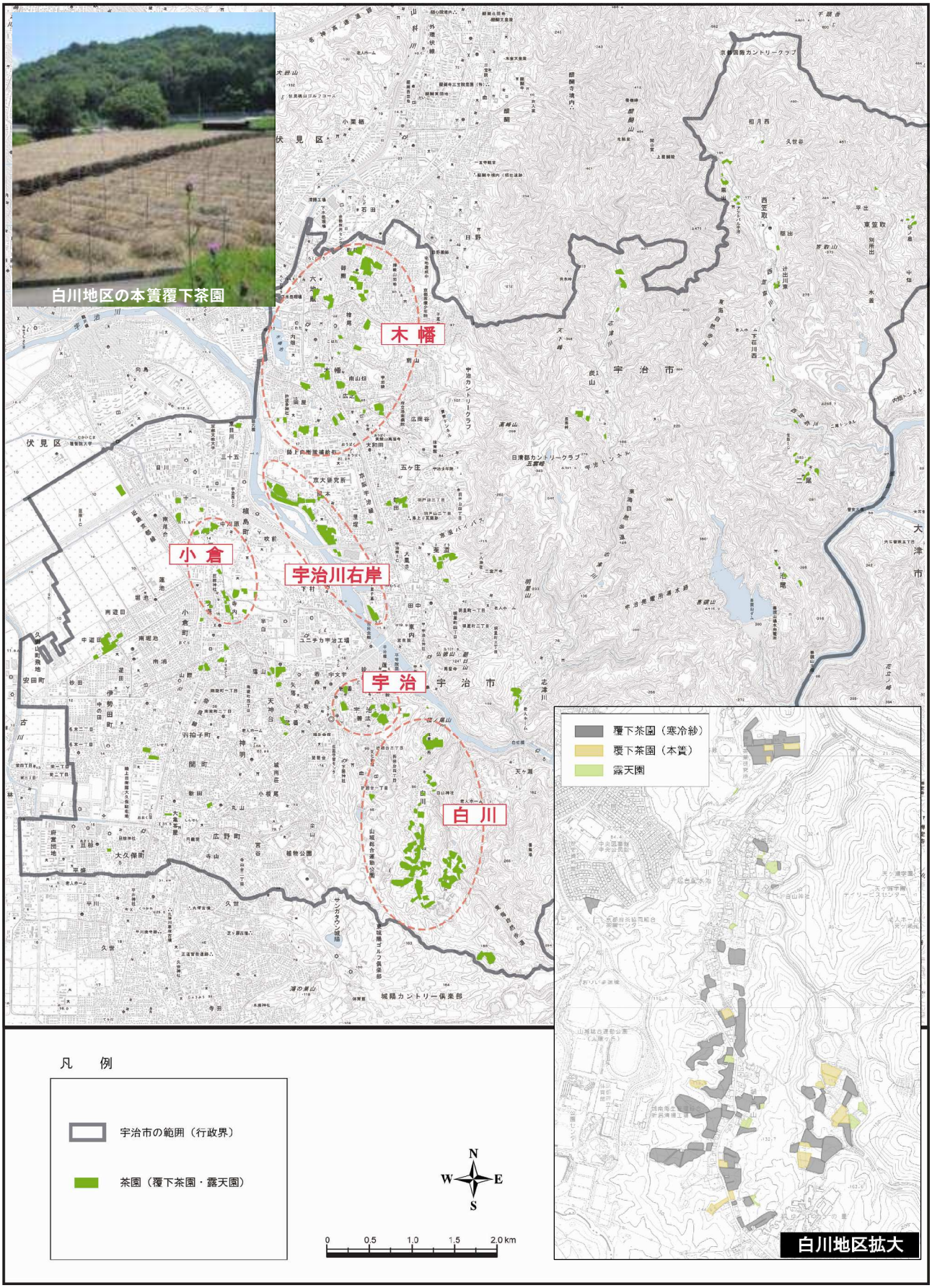
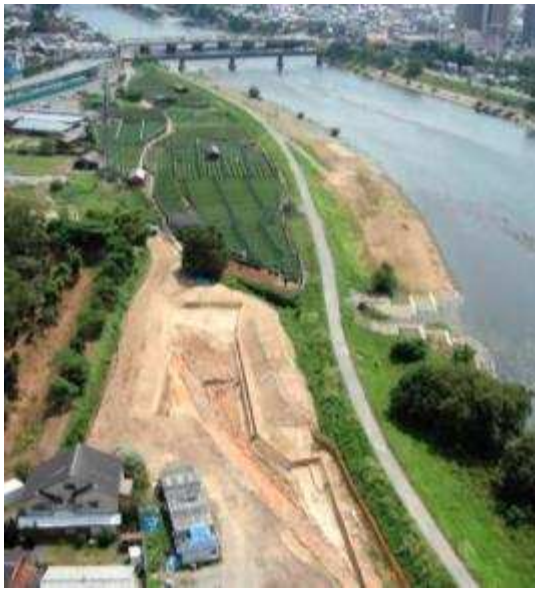


図２-16　茶園の分布状況図（平成 22 年５月調査）

宇治橋下流、宇治川右岸に沿って茶園が連続して広がっている。この川沿いの茶園の形成が、豊臣秀吉の治水工事に由来することが平成 19 年の史跡宇治川太閤堤跡の発掘調査で確認された。太閤堤とは、文禄３年（1594）に秀吉が伏見城築城に伴い築いた長大な堤防のことである。この太閤堤によって宇治橋下流で巨椋池に注ぎ込んでいた宇治川は、現在の川筋に付け替えられることとなった。これによって今まで巨椋池の東岸であった部分が宇治川岸となり、この岸部分に河川の堆積作用によって急速に砂州が形成されていった。この水はけの良い砂州部が茶の木の生育に適していたため、江戸期の宇治茶生産の進展に併せて次第に茶園となっていった。宇治川沿いには、このように形成された良質な茶葉を栽培する茶園が連なる景観を今も見ることができる。

新緑の芽が息吹き始めた４月頃、茶園に覆いが施され、独特の茶園景観ができあがる。ほの暗く涼しい覆いの下で新芽が成長し、初夏の陽気に誘われて茶葉が十分に育った頃になると、近傍から多くのお茶摘みさんが集まり茶摘みに精を出す姿があちこちで見られるようになる。安土桃山時代以降この方、今も変わらない宇治が慌しくも活気づくお茶の季節の風景である。



史跡宇治川太閤堤跡発掘地と宇治川沿いの茶園

史跡宇治川太閤堤跡を埋める砂州と茶園

市街地に広がる茶園

２-２　お茶屋さんの歴史的風致

宇治の地元では、茶を扱うお店を、親しみを込めて「お茶屋さん」と呼ぶことが多い。平等院表参道や宇治橋通り、県通りには多くのお茶屋さんが店を広げ、茶どころ宇治らしい風情をかもし出している。

宇治では鎌倉時代に茶の栽培が始まって以来、覆下などの栽培方法の工夫によって茶葉の質を高めてきた。それとともに製茶技術を研いて茶の質を高め、茶人たちの味覚に試されながら天下一の宇治茶という高級銘柄を獲得してきた。そしてこれらに取り組んできた茶商人たちが「茶師」と呼ばれた人たちであった。いわば、今のお茶屋さんの原点である。

宇治茶師は茶の興隆に合わせて、中世以来将軍家や諸大名あるいは公家や社寺と茶を通じて強く結びついており、江戸時代においては町人身分でありつつ苗字と初期には帯刀を許され、宇治茶の生産流通を支配した特権的階層であった。茶師は大きく御物茶師、御袋茶師、御通茶師に区分され、最上位の御物茶師筆頭の上林家が茶頭取を務めた。いずれも幕府の御用茶師であったが、地位や仕事の内容が厳然と区別されており、それぞれに茶師仲間を組織していた。茶師の家数は時期により変化しており、江戸中期では御物茶師 11 家、御袋茶師 20 家ほど、平茶師ともいわれた御通茶師は最大で 40 家ほどであった。覆下茶園も元来は許可された茶師のみに許される特権であり、当然、茶師が生産した茶は碾茶であった。

お茶屋さんの店先

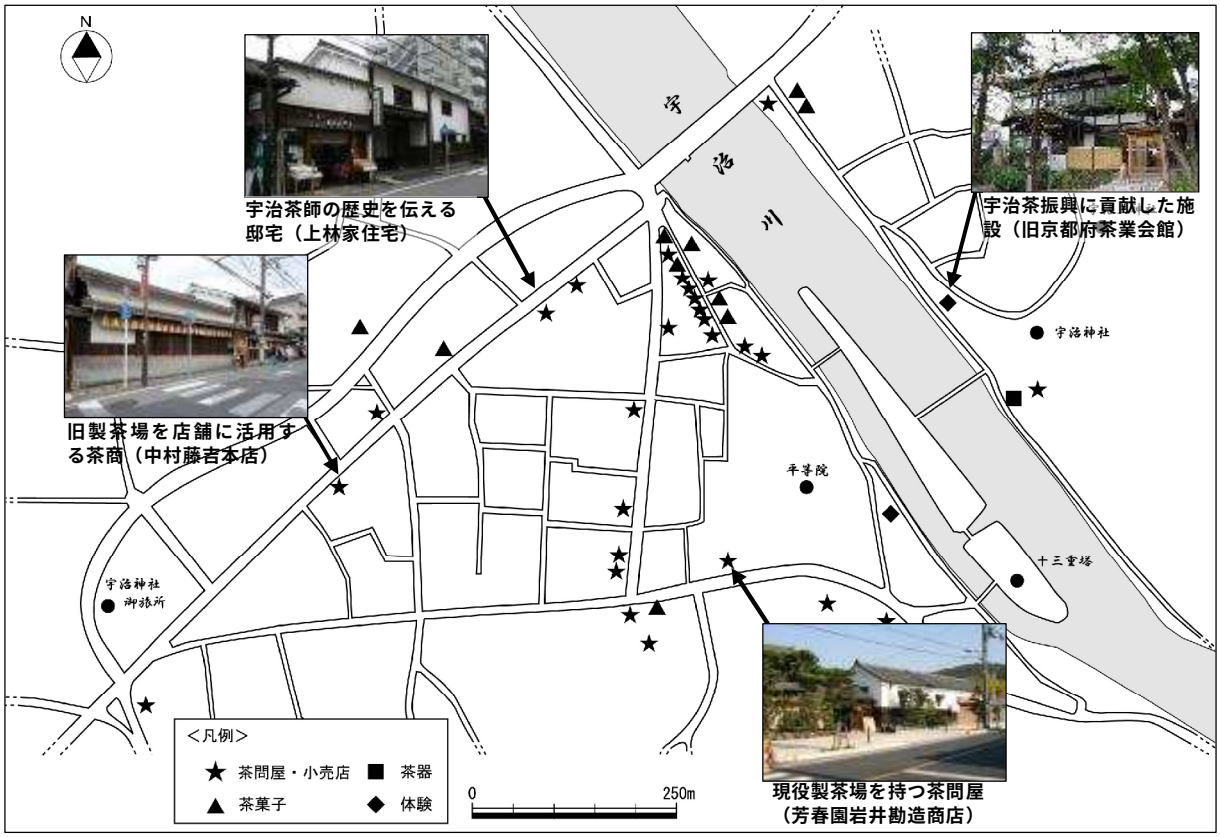


図２-17　茶関係店舗等の分布

江戸時代の宇治は幕府直轄の天領であり、宇治郷代官が置かれていた。この代官を務めたのが、茶師頭取上林家である。また宇治茶師は、将軍家御用の茶を毎年献進する義務を負っており、この茶を江戸へ届けたのが有名な「御茶壺道中」である。「ズイズイズッコロバシゴマミソズイ、茶壺ニ追ワレテトッピンシャン」と歌われるように、御茶壺は将軍家の威光を背景に徳川御三家をも上回る権威を沿道に誇示した。

宇治代官所の門遺構（江戸期）

御茶壺道中は寛永 10 年（1633）に確立（『徳川実紀』）し、幕末まで続いた。

茶壺（江戸期）

江戸幕府は茶の需要者として、碾茶の良否を検分する「御茶吟味役」を置いた。この役は既に室町時代に成立しており、武野紹鷗、荒木道陳、千利休を経て古田織部へと引き継がれていたという（『徳川実紀』）。織部が大坂城夏の陣で豊臣方に味方した嫌疑で切腹したのち、小堀遠州がこの役に任じられている。宇治茶師はこれら茶道大家の繊細な味覚・嗅覚に試されて、宇治茶を育んできた。

近世の絵図などを見ると、多くの茶師は宇治橋通りに家宅を構えていたことが分かる。特に通りの東端、宇治橋西詰に近い所には御物茶師上林各家が集中して門を並べていた。代官家であった上林六郎家の宝暦６年（1756）の間取図には、これら茶師家宅の実像を見ることができる。この六郎家の家宅は御袋茶師長井家を買い取ったもので、間口 29 間（52.2m）、奥行き 53 間（95.4m）の広大な敷地を占め、長屋門を宇治橋通りに開き、表に邸宅、その奥に蒸場や焙炉場などの製茶場や茶園道具倉庫・茶蔵を備えていた。現在、代官家上林六郎家の門は、町中に移築されて残されている。また茶師家宅には池泉が穿たれ、上林三入家には伏見城廃城により移築された月花殿と茶室九窓亭があった。通りには、このよう

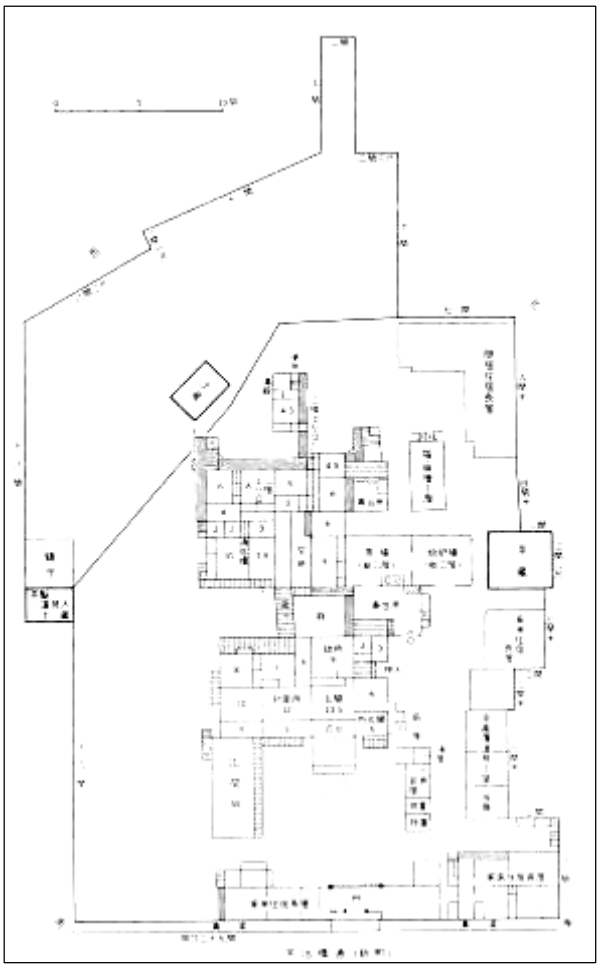


図２-18　代官家上林六郎家間取図（江戸後期）

な茶師家宅と茶櫃製造などの茶に関する手工業者の家屋や町家が混在しつつ、茶どころ宇治の近世町場景観を作り出していた。

茶師家宅の様子は、今も宇治橋通り沿いの上林春松家に残されている。上林春松家は近世初期に宇治郷支配を確立した上林加賀入道久重の第三子を初代とする家系で、御物茶師８家の一家であった。阿波徳島藩蜂須賀家のお抱え茶師であり、尾張徳川家との関係も深く、近世初期から宇治橋西詰の現在地に居を構えている。江戸中期の『宇治郷総絵図』に描かれる春松家は、間口 19 間(34.2m)、奥行き 61 間(109.8m)となっており、かなり広い敷地を占めていた。現在は間口 13 間(23.4m)、奥行き 32 間(57.6m)であり、通り沿いに二階建ての長屋門、中に入ると主屋と座敷庭を設け、主屋玄関西側に茶室松好庵と路地庭となっている。主屋の奥には、昭和 30 年代まで操業していた茶工場が残されている。このような配置は、上林六郎家もそうであるように、茶師家宅の基本的な形態であった。建物の年代については、長屋門は元禄 11 年(1698)の宇治大火後に建てられたもので、現在、茶師の長屋門をよく残す唯一の遺構となっている。主屋は大正 15 年（1926）に建てられたものであるが、前身建物の平面形態をおおむね踏襲して再建されている。茶室松好庵は蜂須賀家よりの拝領と伝え、野地板に寛政 11 年(1799)の墨書が見つかっている。上林春松家辺りは、かつて茶師の長屋門が立ち並ぶ宇治郷の中心地であり、この趣を上林春松家に今も見ることができる。

上林春松家長屋門（江戸中期）

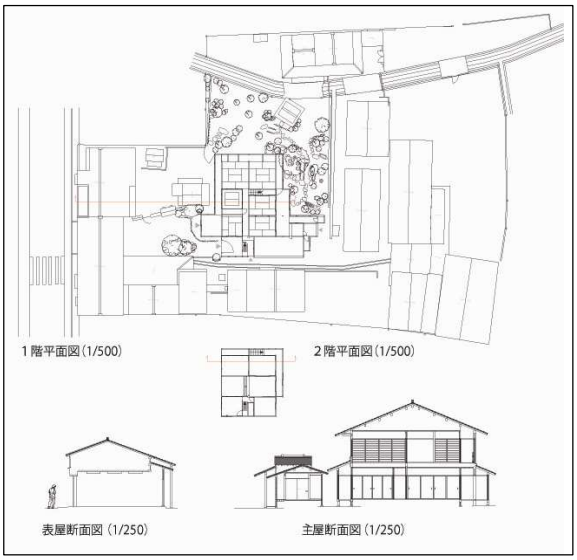


図２-19　上林春松家平面図

明治期に入ると幕藩体制の崩壊によって、将軍・大名を中心とする柳営茶道に支えられてきた宇治茶師体制は庇護者を失い再編へと向かうことになる。代官家である上林六郎家がそうであったように、多くの茶師は変革を乗り越えられず宇治を退転し、邸宅が町家へと細分化されていった。宇治橋通りを例にとると、明治初期の茶師家宅 23 軒に対し昭和初期での茶商は７軒となっている。ただし茶師の没落は、宇治茶生産の衰退を直ちに意味しなかった。それは近代化の中で碾茶需要が落ち込んだ半面、日本の輸出品目として茶は生糸に次いで２番目となり、輸出需要の急速な伸びがあったからである。

この需要を伸ばした茶は、伝統的な茶の湯に使う碾茶を臼で挽いた抹茶ではなく、急須で茶を煎じて飲む煎茶であった。煎茶法の普及は江戸時代中期頃に始まり、幕末には国内でも煎茶需要は拡大していった。我が国の煎茶法の始まりには、黄檗山萬福寺の創建が大きく影響していた。中国明から隠元禅師が渡来し、寛文元年(1661)に江戸幕府の援助のも

と、宇治の北に位置する五ヶ庄大和田に９万坪の敷地を擁す黄檗山萬福寺を開創する。萬福寺伽藍は、山門、天王殿、大雄宝殿、法堂が東西に一直線に並び、主要堂宇を回廊が囲む大規模な禅宗伽藍で、最盛期には塔頭が 33 院にのぼった。現在、萬福寺伽藍は重要文化財に指定されている。また仏像は多くが中国仏師范道生の手によるもので、面貌や装束が異国情緒にあふれている。「山門を　いずれば日本ぞ　茶摘うた」は、寛政２年(1790)に俳人田上菊舎が萬福寺を訪れ、この寺の中国風情に酔いしれて山門を出たときに、門前の茶園から聞こえた茶摘み歌で我に返った時のものである。この門前の茶園は、鎌倉時代に明恵上人が初めて宇治に茶の木を伝えたとされる場所で、現在の駒蹄影茶園石碑あたりである。

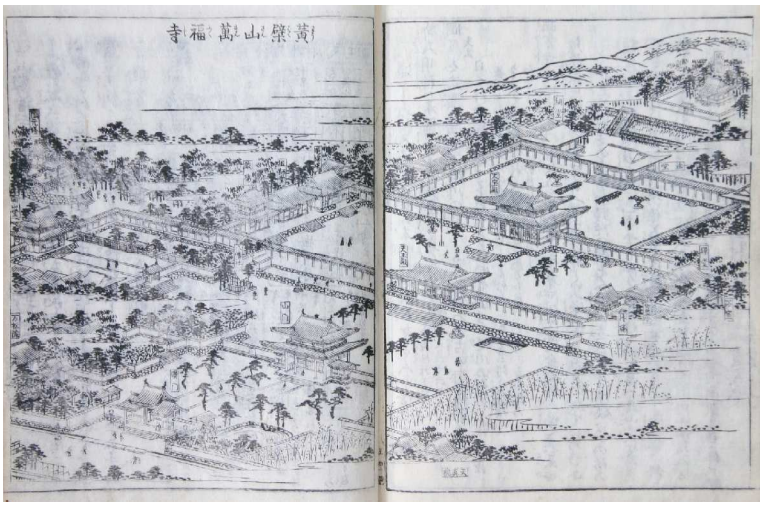


図２-20　黄檗山萬福寺『都名所図会』（江戸後期）

黄檗山萬福寺大雄宝殿（重要文化財）

萬福寺での全国煎茶道大会

市内で振る舞われる本格的な煎茶（匠の館）

　この隠元の渡来によって、抹茶として飲む茶とは別の、煎茶法が我が国にもたらされたと言われている。もともと煎茶は明の文人層に愛好された飲茶法で、我が国でも次第に庶民の中に広がっていった。特に黄檗僧で売茶翁と呼ばれた高遊外の活躍と、篤農家であった永谷宗円による色や風味に優れた緑茶の考案（元文３年(1738)）によって、確実に煎茶法は普及を始めることとなった。また幕末に宇治の西側にあたる小倉地区で考案されたという玉露は、碾茶用の覆下茶葉から高級煎茶として製茶されたものであり、本来露天で栽培される茶葉を用いる煎茶法の拡大が宇治の伝統的な方法に影響を与えたものといえる。江戸時代を通して、茶の生産は柳営茶道に対応する碾茶ばかりでなく、次第に町人層に広がっていった煎茶需要への対応も進んでいたのである。現在萬福寺境内には全国煎茶道連盟の本部が置かれ、毎年全国煎茶道大

会が開かれている。

明治時代に入ると、時代変革と新しい茶需要をとらえて、近代的な集約的かつ大規模な宇治茶生産と販売を行う茶商が登場し、通り沿いに店を構えていった。近代の茶商家宅をよく伝えるものとして、中村藤吉本店がある。宇治橋通りの中ほどに、長い間口をとって昔ながらの店構えが伝えられている。中村藤吉家の創業は、茶師星野宗以所有の居宅を買い取って商いを始めた安政元年（1854）頃に始まるとされる。当初は現在の店構えの東半分に居宅と店を構えたが、次第に敷地を西に広げ、明治 29 年（1896）には通りに面した長大な製茶工場が建てられている。この工場には幾台もの製茶用焙炉が窓際に並び、焙炉師などの職人により手もみ製茶が行われていた。このように明治期の茶商の家宅は、生活や家業の雰囲気を外に伝える商人らしい空間配置であり、江戸期の茶師家宅のように表に長屋門を構え、その中に主屋と奥に製茶場を設ける武家屋敷風の配置とは異なる点に特色がある。更に大正期になると機械化が進み奥に新たな製茶工場が建てられ、近代化による空間配置の変化が明瞭に追跡できる。現在、中村藤吉本店では製茶は行われておらず、茶や茶を使った菓子類などの小売りや飲食で来訪者を迎えているが、時代の変化に合わせて家業を持続してきた宇治茶商の様子を今に伝えている。

宇治橋通りの中村藤吉本店

中村藤吉本店の店内

京都府立茶業研究所

このような茶商は、茶農家から買い付けた荒茶を製茶し、様々な種類の茶へと仕上げを行い、また銘柄に合うように茶葉をブレンドして商品化をする。茶商の味や香りに関する繊細な感覚と技術は、古くからそれぞれ切磋琢磨して研ぎ澄ましてきた「技」であり、今に継承されるこの技術が宇治茶の高い品質を保証している。また宇治茶の品質向上のため、京都府下茶業組合取締所（現在の社団法人京都府茶業会議所）が明治 17 年（1884）に設立され、大正 14 年（1925）には京都府茶業研究所（現在の京都府農林技術センター茶業研究所）が設立され、宇治茶振興の組織づくりが行われた。

本来、茶師も茶商も問屋業であるため基本的に小売りはしない。しかし現在、宇治における茶の小売店舗の数は多い。これは近代化の中での茶業界の変化とともに、近代的鉄道網の整備で宇治の観光化が進み、宇治茶が宇治の土産物として注目されたためである。特に昭和 29 年（1957）に鳳凰堂が 10 円硬貨のデザインとなったことにより、平等院への修

学旅行や観光客が急速にのび、平等院表参道では宇治茶の小売店が立ち並び、新たなお茶屋さんの景観を作り出している。また茶団子や抹茶羊羹などの菓子類も考案され、宇治名物として定着している。

毎年６月の新茶の売り出しが始まる季節になると、宇治ではそれに合わせて祭りが行われる。平等院の西南にある縣神社で開催される「あがた祭」である。あがた祭は、毎年６月５日から６日未明にかけて行われる。梵天と呼ばれる神の憑代が深夜に町を渡御巡行し、所々でブン回しと呼ばれる過激な回転儀礼を行う。昔は闇夜の祭りとして、梵天渡御に際して宇治の町は一切の灯火が禁止された。近世では、毎年旧暦の５月５日の夜半に執り行われていたが、その様子を具体的に記したものはなく不明な点が多い。しかし、天保３年（1832）の『増補日本年中行事大全』に「祭礼火を禁じ闇中渡御」と紹介されており、当時からあがた祭は宇治郷の周辺にとどまらず、近畿地方ではよく知られていたと考えられる。この祭りは、江戸時代の宇治郷では製茶の最盛期に多くの労働者を周辺地域に依存していたため、繁忙な茶づくりから解放されたこれら労働者の労をねぎらう祭りともなったとされる。現在では 600 軒を超える露店が連なり、12 万人を超える人たちが訪れる近隣含め最大規模の祭りとなっている。

宇治にはこのあがた祭や、近代化の中で茶業振興のために始まった宇治茶まつり、新茶の収穫時期である６月と仕上げ茶を献上する 10・11 月頃に行われる献茶祭といった行事が数々あり、茶への畏敬と感謝の気持ちを表すと同時に、まちに茶を楽しむハレの日の賑わいをもたらしている。

平等院表参道に立ち並ぶお茶屋さん

現在のあがた祭り

深夜の梵天渡御

宇治茶まつりでの宇治橋三の間からの
名水汲み上げの儀

このように宇治のお茶屋さんの風景とは、室町時代後期以降、天下一の茶を生み出し我が国の茶文化に大きな足跡を残してきた宇治茶師の技と伝統を継承しつつ、歴史的な宇治のまちなみの中で今も多くの人を迎えて商いを続ける、茶どころ宇治ならではの風情を醸し出している。

３．宇治に伝わる祭礼の歴史的風致

３-１　大幣神事の歴史的風致

宇治川の西岸に広がる宇治市街地は、平安時代後期の藤原摂関家による街区形成を都市的発展の始まりとし、伝統的な木造家屋が多数伝えられている地区である。このあたりを地元では「中宇治」と通称している。まちの形状は、宇治橋通り・県通り・本町通りの３本の主要街路が二等辺三角形状に交差し、その中を碁盤目街路が区切る独特のかたち（三角形街区）をしている。

この全国的に珍しい三角形街区の形成は、平安後期に平等院創建に合わせて別業邸宅群を整備するため、もともとの街道（本町通り）を利用しつつ、その背後地に平等院西寺域に沿って大和大路（県通り）を敷設し、これらを骨格に都のような碁盤目街路が敷設されたことに始まる。この時、宇治橋は現在位置に移設されている。それまでは、おそらく平等院鳳凰堂の南側で川を渡していた。更に南北朝の兵火で宇治の町が罹災し、その復興の中で主要街路として宇治橋通りが敷設された結果、南北朝期に宇治の三角形街区が成立した。

この歴史的な街区には、この土地の人々の信仰を集める古くからの祭礼が継承されており、ハレの日には時が遡ったような古式あふれる風景をまちなかに見ることができる。

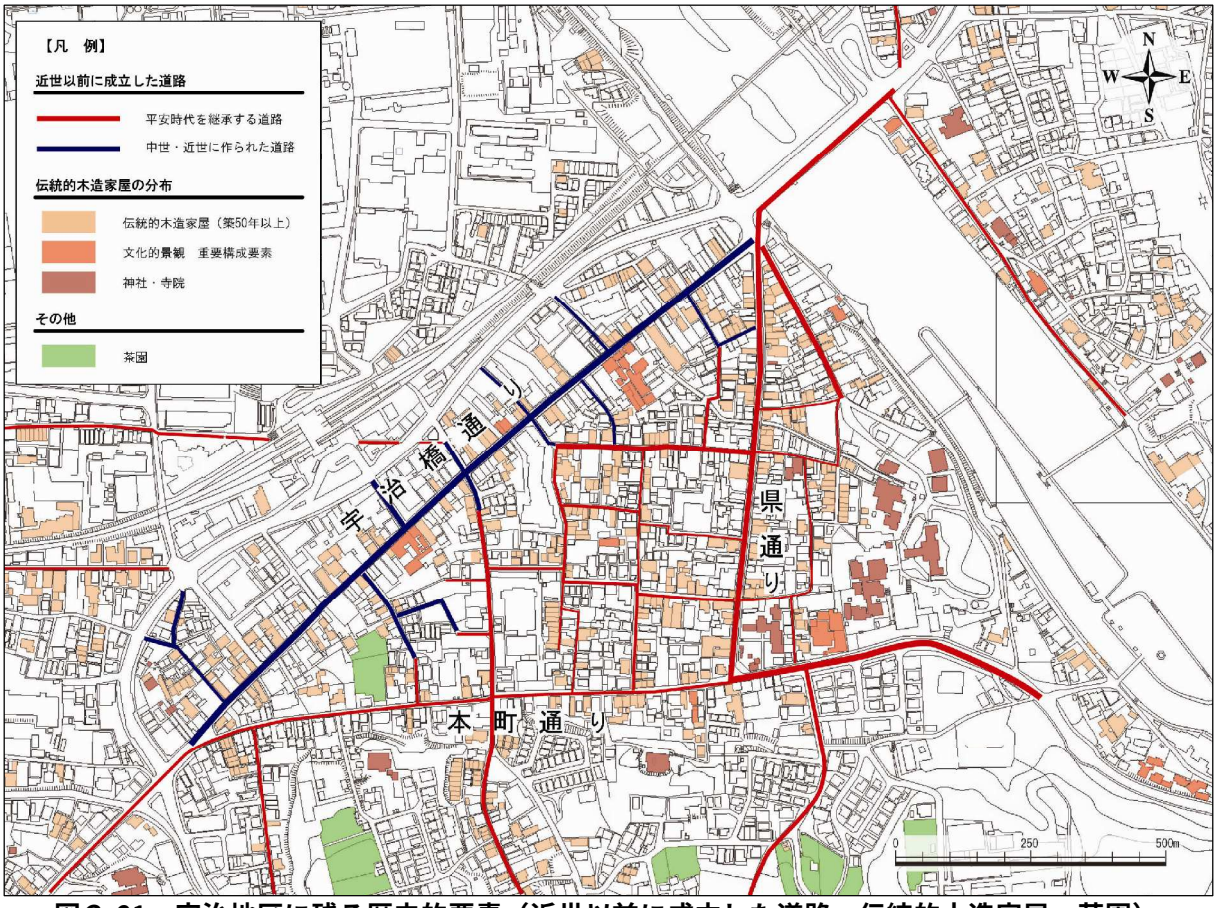


図２-21　宇治地区に残る歴史的要素（近世以前に成立した道路・伝統的木造家屋・茶園）

大幣神事は、梅雨時に中宇治に集まる疫神をまちの外へ追い出すものであり、神事の概略は神の憑代である「大幣（たいへい）」と呼ばれる大きな御幣を、古式ゆかしい行列とともに三角形街区を巡行させて疫神を集め、宇治川に流して祓うものである。

大幣神事を行う縣神社は、神仏分離まで平等院の鎮守社となっており、宇治郷からは毎年灯明料が寄進されていた。現在の建物は明治期のものであるが、始まりは古墳時代の大和王権の直轄地「宇治の県」の守り神として祀られた時に遡るとされ、宇治郷の人々にとっては地主神の離宮社(宇治神社・宇治上神社)と同様に崇敬されてきた。

このような町衆や郷民が主催する大がかりな疫神送りの民俗行事は、京都の祇園祭からも知られるように、室町時代に盛んになったものである。大幣神事も、祇園祭の山鉾や飾り物との類似性から、ほぼ同じ頃に成立したとされている。神事に使用する用具・衣装などは、中世の形態を伝えており、「大幣」の名称の文献初出は、『菟道旧記』（元禄 10 年（1697））である。

大　幣

縣神社拝殿

図２-22　江戸時代の大幣神事『菟道旧記』（江戸中期）

『蒐道旧記』にはこの祭礼の行列が描かれており、その様子は現在とおおむね近いものとなっているが、かつては数々の祭具や芸能が付加され、更に華やかなものであったと考えられる。例えば現在、風流傘は１基であるが､往時は 66 本にも及ぶ蓋鉾が出されていたという。また大幣の一部を持ち帰ることでその一年の厄が除かれると信じられており、これを厄除けとして玄関などに据え付ける人たちも多い。

大正期の大幣神事

現在この神事を運営するのは「大幣座」で、旧久世郡宇治郷の有志が中心となった地縁的なまとまりである。梅雨時期に蔓延する疫病を疫神の仕業と考えられていた当時、疫神を町中から追放しようとする疫神祭は住民の手で広く行われており、大幣神事も神社を中心とした祭礼というよりも、郷民自身が郷中のために行う神事の性格が強い。

大幣の御利益を求める人たち

大幣神事は、宇治神社の還幸祭と同日の６月８日に行われるが、祭の主役ともいえる大幣は、大幣座の衆によって大幣殿にて６月１日に組み立てが始まり、翌２日の夜、和紙の幣を貼り付ける作業を行い完成させる。大幣は､「傘御幣」の別名があるように、1,000 枚余りの幣で飾った格子状の棚に松枝を添えた黄色い布張りの傘を３本刺した、類を見ない形状である。この傘に、疫神を退治する神が依りつくとされる。祭礼の前日には、縣神社においてお供え（小梅・若布・餅など）や、祭列に加わる傘鉾や杓矛などの祭具・衣装を準備する。

大幣神事の行列（左から御方・大幣・祭具を持つ小舎人）

祭礼当日は、午前 10 時ごろに縣神社前の大幣殿にて儀式を行ったのち、供物が参列者に配られると、大幣を担ぐ幣差（力者）や馬に乗った神人（御方）、祭具を持った小舎人（小学生の男子）や大幣座の人々、神官などの行列が出発する。

行列は、県通りを経て宇治橋西詰へと至り、そこで祭事を執り行う。その後、宇治橋通りを進んで一の坂の手前に至ると一行は休憩し、一の坂と御旅所との間を４往復する駆け馬が行われる。行列は再び、本町通りを進んで大幣殿へと戻る。

途中、道の辻々では、幣差が大幣の竿の根元を地面に打ち付ける所作を行いながら進む。大幣殿の手前に到着すると、大幣は引き倒され、幣差たちが引きずって県通りを全速力で走り抜け、宇治橋から川に投棄される。御方は馬で大幣を追走し、宇治橋の上から投棄されたのを見届けると大幣殿に戻り神事が終了する。

古式の装束を身に着け中世以来の祭具を持した大幣の行列が、茶問屋や町家の連なる平安時代に由来を持ち中世期に形成された三角形街区を、様々な祭事を行いつつ住民の力に支えられながら巡行する様子は、宇治で数百年にわたって培われ積み重なってきた歴史の厚みが、ハレの一時、まちなかに放散されるような風情と賑いを伝えている。

三角形街区を巡行する大幣神事の行列

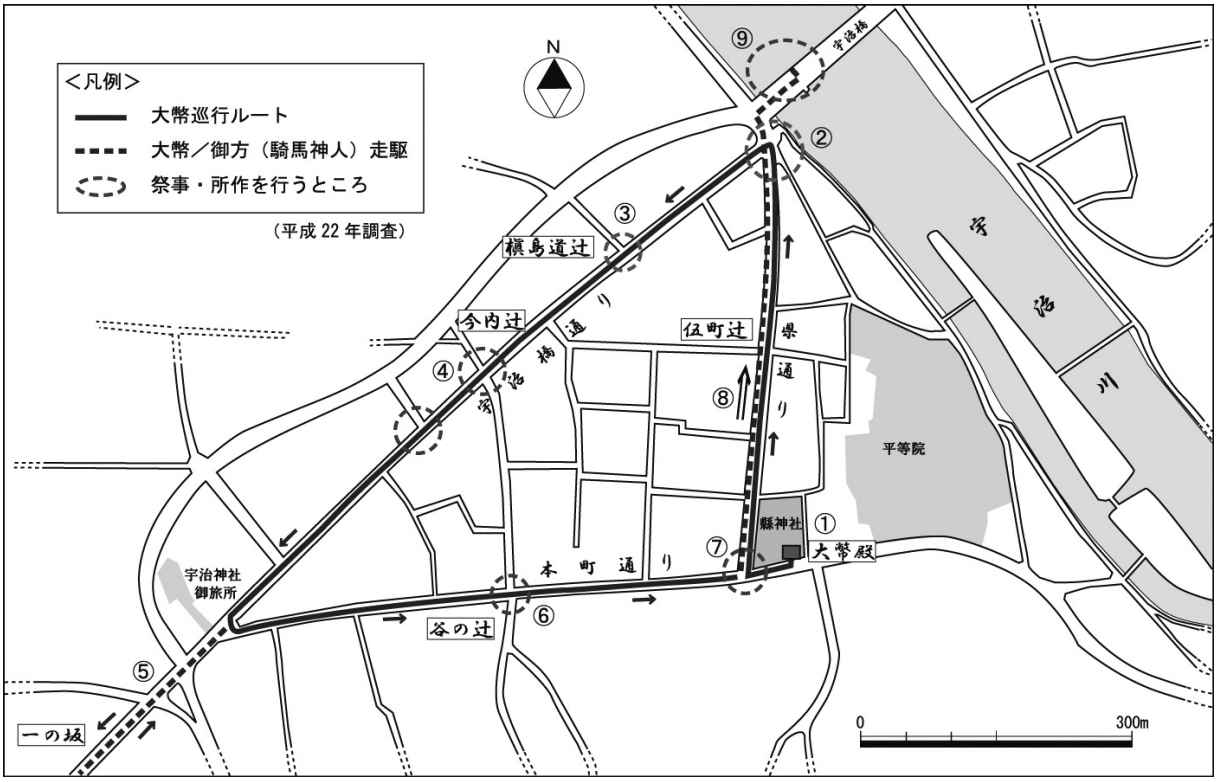


図２-23　大幣神事の巡行ルートと祭儀の場所

①大幣殿前の祭神勧請

①神饌の小梅、若布、餅などが参列者に配られる

②宇治橋西詰での祭儀

③辻ごとで行われる所作

④辻ごとで行われる所作

⑤御旅所前から馬を走らせる神事

⑥辻ごとで行われる所作

⑦時計回りに３回回る

⑦地面に引き倒し破壊

⑧幣差が破壊した大幣を引きずって全力疾走

⑧御方が幣差を追いかける

⑨大幣を宇治川へ投棄

３-２　離宮祭の歴史的風致（宇治神社と宇治上神社の祭礼）

宇治に継承される祭礼の最も古いものとして、宇治神社と宇治上神社でそれぞれ行われる神幸祭と還幸祭がある。

この両神社はもともと離宮社の上社と下社であったが、明治初年に現在のように分離した。平安時代前期の『延喜式』には「宇治神社二座」と記載され、古くは二つの社を束ねて宇治神社と呼んだが、後に「離宮社」や「離宮明神」、「離宮八幡」と呼ばれるようになる。「離宮」とは、祭神の菟道稚郎子命あるいは父の応神天皇の離宮がこの地にあったためとされる。現在、宇治神社には菟道稚郎子命、宇治上神社には菟道稚郎子命と応神天皇そして兄の仁徳天皇が祭られている。

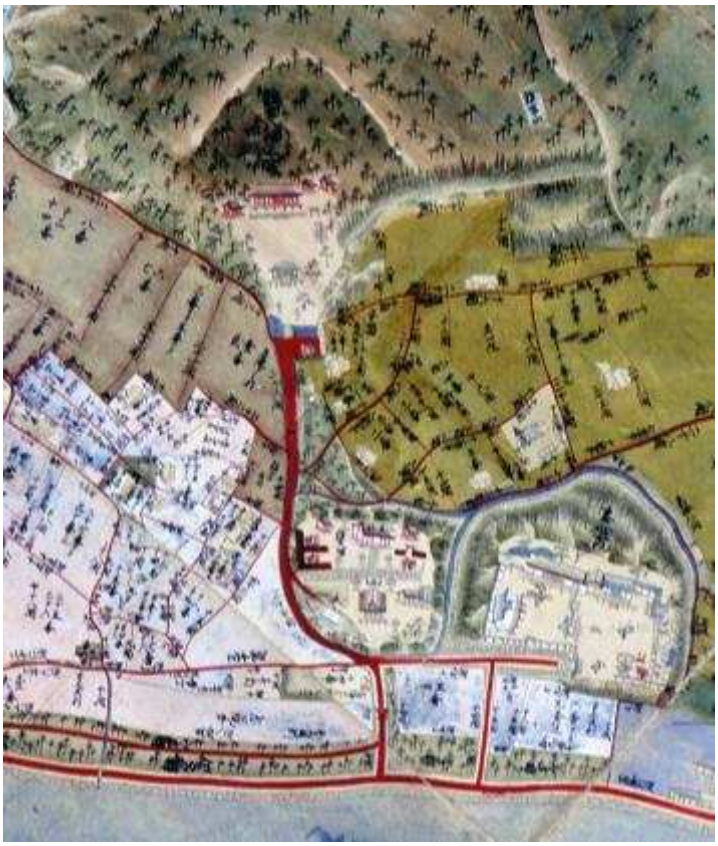


図２-24　江戸時代の離宮上社・下社『宇治郷総絵図』（江戸中期）

そもそも離宮社が現在地に整備されたのは、平等院創建から８年後の 1060 年頃であることが近年の年輪年代分析で明らかとなり、平等院と同じく藤原頼通の造営になると考えられるようになった。世界遺産となっている国宝の宇治上神社本殿が、この時に建てられたと考えられる。この本殿は、内部に内殿三社を祀り、内殿の壁や屋根の一部を共有する覆屋を構えて一体の建物としたもので、極めて珍しい構造となっている。国宝の宇治上神社拝殿は鎌倉時代前期の造営であり、貴族の寝殿造邸宅の様式を伝える正面７間の細長い建物で縁が回り、檜皮葺屋根は特徴的な縋破風（すがるはふ）となっている。また宇治神社本殿は大型の流造檜皮葺で、鎌倉時代の造営であり、重要文化財に指定されている。

宇治上神社本殿（国宝・世界遺産）

宇治神社本殿（重要文化財）

藤原頼通による離宮社の整備は、『扶桑略記』

（治暦３年（1067））の後冷泉天皇の平等院行幸関係記事から、この世の極楽浄土として造営された平等院と対をなす、現世の象徴的宗教施設であったと考えられている。

この離宮社の祭礼が離宮祭であり、平安時代には都にも聞こえた華やかな祭礼であった。離宮祭の祭式の整備は延久２年（1070）であるとされ、藤原氏の支援を受けて毎年５月８日に盛大な祭礼が行われた。きらびやかな神輿渡御や華やかな祭礼行列に、田楽や散楽、馳馬などの行事が行われ、貴賤の見物人数千人、見学の船千艘を数えたという。そしてこの祭礼には氏子である宇治と槇島の人々が奉仕していたことが、『中右記』(長承２年(1133))に記録されている。中世になり、藤原氏が宇治の地から次第に退転していくにつれ、離宮祭はこの土地の地主神を祀る本来の祭礼へと変化するが、藤原氏の洗練による祭礼の華やかさは継承されていく。江戸時代の『菟道旧記』には、大きな御幣を捧げ持つ７人の侍者を先頭に、巨大な天狗や鬼の面、槍鉾を捧げる多数の人たちが侍す３基の神輿を中心とする華やかな行列が描かれている。現在の行列は『菟道旧記』に描かれる大きな御幣や巨大な天狗や鬼の面あるいは槍鉾を捧げる人もなくなり、いずれも神輿を核とする法被姿の人々による比較的単純な巡行行列となっている。

昭和 30 年頃の還幸祭

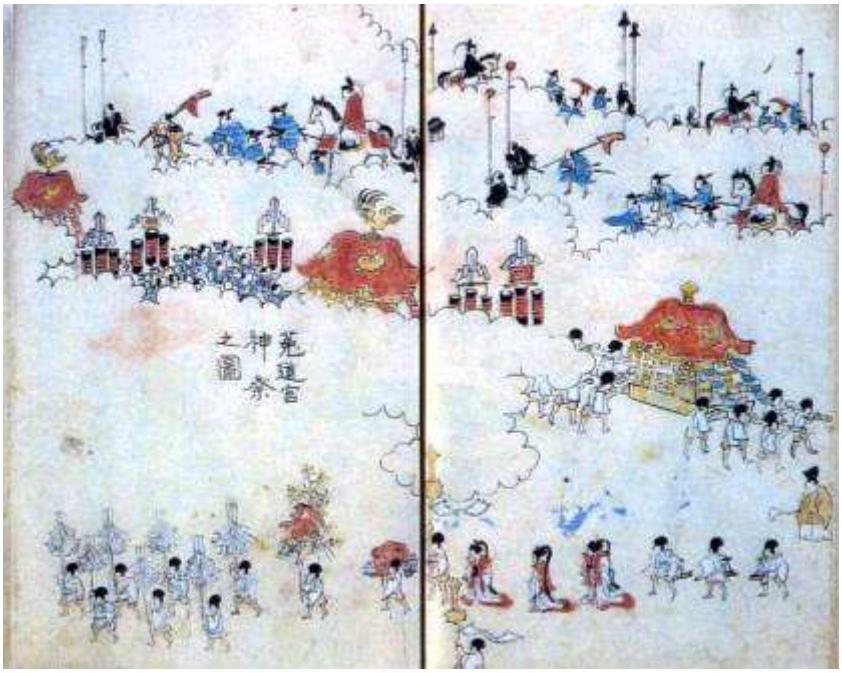


図２-25　江戸時代の離宮祭『菟道旧記』（江戸中期）

このような離宮祭も明治の二社分離時に二分され、それぞれの本社から祭神が神輿に依り御旅所へと巡行する神幸祭､御旅所から本社へと還る還幸祭として祭礼が行われている。宇治神社の祭礼は宇治地区の氏子によって、宇治上神社の祭礼は槇島地区の氏子によって継承されている。

旧宇治郷は、宇治神社を氏神としており、祭りとして神幸祭と還幸祭が行われる。毎年５月８日、宇治川で祓い清められた１基の御輿にご祭神が移され、宇治神社から川を渡り中宇治の西の外れにある御旅所にお移りとなる神幸祭が行われる。神輿は１カ月間御旅所に安置され、６月８日に本社にお戻りになる還幸祭が行われることになる。もともと離宮社の御旅所は現在地より更に西北にあったが、明治の二社分離によって宇治神社の御旅所は現在の場所に移転している。

宇治神社御旅所

御旅所内に１か月安置される神輿

神幸祭は比較的静かに行われるが、還幸祭は供奉する人たちも多く賑やかに広い範囲で行われる。昭和 40 年代ごろまでは、神輿の巡行の賑やかさと見物人の多さとで、大変混雑したという。

還幸祭神輿巡行は、同日の午前中に行われている大幣神事の巡行が終わった昼過ぎを見越して御旅所を神輿が出発する。担ぎ手は法被姿で、威勢よく掛け声をかける。還御の道筋は、御旅所を出たのち南西の方向に旧奈良街道を進み、途中で反転して元に戻りつつ脇道に入り、御旅所の前で北方向に進みつつ宇治橋西詰に至り、県通り、本町通り、宇治橋通りの三角形街区を巡りつつ､宇治橋を渡って川東の各町内を経て宇治神社へと戻るものである。正午近くから日没をかけて、全長 20ｋｍを練り歩く。この巡行の道順は毎年若干の変更があるが、三角形街区外周は必ず通ることとなっている。かつて離宮祭のころは氏子の宇治郷各町から数人ずつ担ぎ手が出ていたが、二社分離した明治初年からは旧来の町を「番組」又は「班」と呼ばれる合計 10 の組織に編成し直し、現在は９つの番組が毎年交替で平安時代以来の祭礼を継承している。

①御旅所を出発

②野神社前で休憩

③宇治橋通りを巡行

④本町通りから南に伸びる旧道を巡行

⑤宇治橋は御輿を担いで渡る

⑥宇治神社参道を御輿を担いで上がる

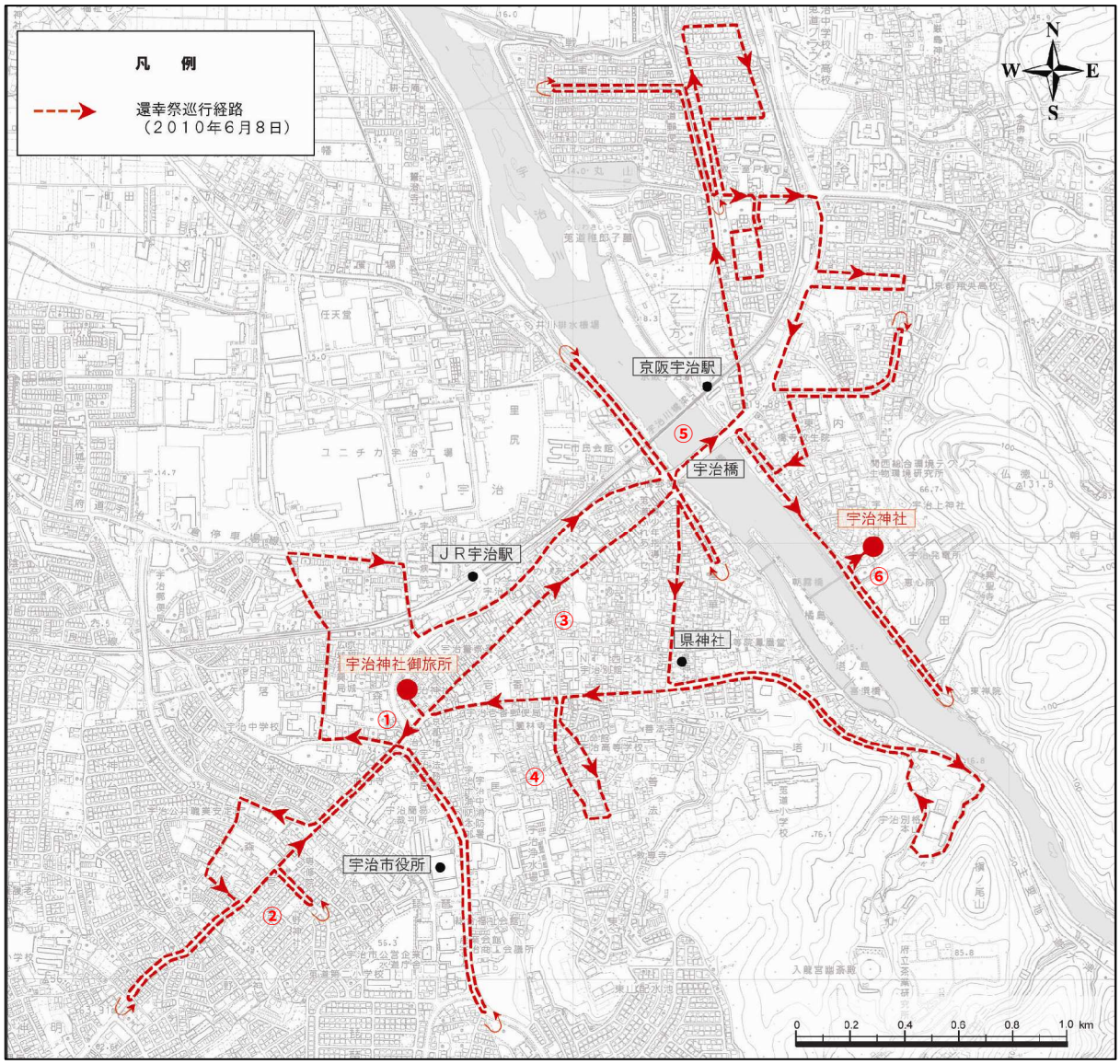


図２-26　宇治神社還幸祭巡行経路（平成 22 年６月８日調査）

宇治上神社の神幸祭は５月１日に執り行われ、宇治上神社から２基の御輿が御旅所となる槇島地区の集会所へと巡行する。還幸祭は４日後の５月５日であり、御旅所の集会所を出発し地区内を巡行した後に宇治上神社へと還御する。このように平安時代の現存最古の国宝社殿を伝える宇治上神社の祭礼は、平安時代以来の槇島の氏子によって今も守られている。

元来の離宮祭は、宇治を氏子とする下社と、槇島を氏子とする上社が、一体で執り行っており、上社２基、下社１基の計３基の神輿が華やかな行列とともに巡行した。離宮社御旅所もかつて現在の宇治中学校の北側にあったが、二社分離そして鉄道の敷設による土地利用の変化などによって現在地へ宇治神社御旅所として移転したのに伴い、宇治上神社の御旅所は現在の槇島集会所を利用するようになった。

平安時代、藤原氏の支援を受けて発展した離宮祭は、中世期での藤原氏宇治退転、明治の二社分離という歴史の激動に翻弄されてきたが、祭礼を担ってきた地域の人々のまとまりは継承され、宇治地区・槇島地区の氏神の祭りに姿を変えながら、今も守られている。

図２-27　宇治上神社還幸祭巡行経路（平成 22 年５月８日調査）

3-3　白川白山神社の歴史的風致

白川の集落全景（左上方は宇治地区）

白川集落は、宇治の中心部から南東に向かって山一つ越えたところにある谷里である。ここは宇治市内では少なくなった、まとまった規模の茶園が継承される地域であり、都市近郊にありながら静寂な雰囲気に包まれる風情は、まさに「奥宇治」と呼ぶにふさわしい。

白川集落の形成は、宇治が平安貴族たちの別業の地であった頃、藤原頼通の娘で後冷泉天皇の皇后となった四条宮寛子が、康和４年（1102）に建立した白川金色院に始まるとされる（「金色院御堂再興勧進帳」1463 年)。白山金色院のかつての寺域は、南北500m、東西 300mの広大な範囲で、往時の平等院に匹敵する規模を誇り、多くの堂塔や坊舎を擁していたとされる。中心的な仏堂は文殊菩薩を安置した文殊堂とされ、金色螺鈿に輝く美しい御堂であったとされる。この白川金色院に関する現存最古の史料として、石山寺（滋賀県大津市）が所蔵する経典がある。経典の奥書には、仁平４年（1154）から永暦２年（1161）までに「宇治白河別所」で書写したと記されている。また藤原定家の日記『明月記』には、元久元年（1204）従一位太政大臣の九条良経が、平等院参詣後に訪れたとある。白川金色院は、長禄４年（1460）に盗賊の放火で全焼したが直ちに復興され、白川十六坊と呼ばれる子院群が立ち並んだ。これらのいくつかは江戸末期まで存続したが、明治初年の廃仏毀釈で廃絶した。現在は、室町時代の惣門が残り、かつての広大な寺域は集落の東斜面部の棚田や茶園・里山となっている。宇治に多くの参詣者が訪れる江戸時代、山城国地誌『雍州府誌』（貞享元年（1684））には、白川は「山水幽邃の地にて誠に小桃源と謂うべし」と評され、宇治の近郊でありながら、宇治とは異なる幽閑静寂な白川にも参詣者が遊覧していたことが分かる。

金色院惣門

白山神社拝殿（重要文化財）

この静寂な雰囲気に包まれる白川集落の中ほどに位置する白山神社は、この白川金色院の鎮守社であり、久安２年（1146）に創建されたと

図２-28　『白山神社之図』（江戸後期）

伝えられる。金色院廃絶後も地域の産土神として信仰を集めている白山神社は、明治以降に境内の摂社や末社をいくつか失ったが、現在は明治期の本殿と建治３年（1277）建立の重要文化財の拝殿を伝えている。この拝殿は、方形３間で茅葺屋根の一見質素な住宅風建築であるが、内部は折上げ格天井をもつ気品あるもので、平安文化の雰囲気をよく伝えている。この白山神社には、興味深い祭礼が伝承されている。これらの祭礼は、白川金色院で行われていた儀式が寺院廃絶後も白山神社の祭礼として残り、地元に伝えられてきたものと考えられている。

白山神社の祭礼は、春祭り（３月 18 日）、虫干し祭り（７月 18 日）、秋祭り（10 月 18 日）、御火焚祭り（12 月 18 日）の４回行われている。これらの祭礼はトウヤ（頭屋）と呼ばれる、毎年交替制の３軒の当番の家によって準備が進められる。

白山神社拝殿で行われる虫干し祭りの神事

虫干し祭りの白砂撒き

「虫干し祭り」は、神事の後に神社の通路に、道状に白砂を撒く行事である。撒く砂は、かつては神社下を流れる寺川の砂を用いたが、現在は寄進された砂を神社上まで運び上げている。砂撒きと同時に神社周辺の草取りなども行い、終了後はふもとの集会所で直会となる。虫干し祭りは寺や神社の書物や衣服などの虫干しを行うことに由来するが、現在はそのようなことはなく、時代の変遷の中で祭礼の変化が見られる。

「百味の御食（おんじき）」は 10 月 18 日の秋祭り前夜に白山神社に供えられる神饌のことであり、古式の風を伝えている。正徳元年（1711）に刊行された『山城名跡志』には「白山権現社　在仏殿南山上　拝殿<西向>　社<同>　所祭白山権現例祭九月十八日」とあり、百味の御食を行う秋祭りを紹介している。百味の御食は、奈良県の談山神社の例が著名であるように、中世期には各地でしばしば行われていたものである。

百味の御食を作る頭屋

例祭の前日、白川で栽培し手に入る百種をこえる農産物を使い、百味の御食の準備にとりかかる。作り方は、まずシダの茎で作った「マンポ」と呼ばれる軸に作物を差し、それらを土台となる南瓜の表面に突き立て、更に南瓜の上部には粳米・糯米の穂を立てたのち、周囲を茶の枝葉で取り巻くように飾り仕上げるものである。

百味の御食に使う農作物

かつては深夜になると、頭屋３軒がそれぞれの神饌を持ち寄り、神酒・赤飯・豆腐を添えて、揃って神前に献上していたが、現在は神社ふもとの集会所に頭屋３軒が集まって作っている。また百味の御食は、かつては神前に供えられた後に、夜が明ける前に下げられて神社前の寺川に流されていた。住民たちは夜中に神前に参拝するため、神前は暗闇のため全く見ることができなかったというが、現在、このような寺川へ流す行為はなくなっている。この百味の御食に供えた農産物の品目や作り方は、製作中に頭屋によって記録され、翌年の頭屋に伝えられ受け継がれていく。

完成した３つの百味の御食

このように白川には、平安時代に創建された金色院で行われていた神事が、寺院廃絶後も地域の人々によって白山神社の伝統的な祭礼として守り伝えられており、静寂な谷里景観と相まって、趣のある歴史的な風情を今も見ることができる。

４．宇治市の維持向上すべき歴史的風致のまとめ

宇治市の維持向上すべき歴史的風致の概要は図２－29のとおりであり、宇治の古代から現在に至る長い歴史の中で発展あるいは変容しながら受け継がれてきたものである。

宇治橋周辺の社寺建立や宇治川遊覧、旧宇治郷内外の祭礼行事など、これらの活動の始まりは平安時代まで遡るものが多い。平安時代の優れた文化遺産としては、著名な平等院や宇治上神社に代表されるが、今日に続く宇治の都市的発展は貴族たちの別業群の存在なくしてはありえず、今日に続く祭礼行事や宇治川遊覧などの諸活動は別業の地宇治で華開いた平安王朝文化にその淵源を持つものである。すなわち、平安時代後期に藤原摂関家による別業が宇治に存在し、時の権力者が日常生活の場として王朝文化の粋を集めたことは、自然環境に恵まれた歴史・文化の豊かな地としての宇治のイメージに深い影響を与えている。

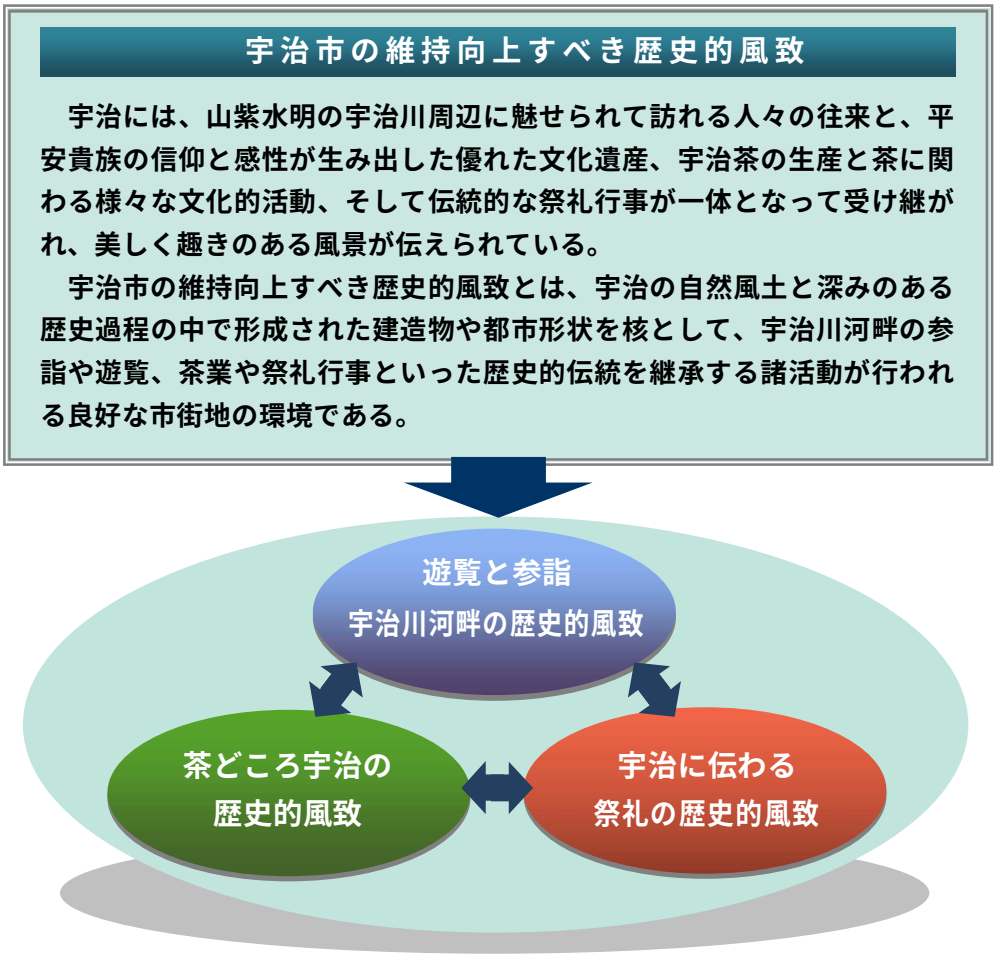


図２-29　宇治市の維持向上すべき歴史的風致の概要

中世以降の宇治は、貴族の経済力から次第に自立し、在郷の町として経済力を高めていった。武家社会に浸透しつつあった茶を飲む風習と呼応しながら、茶の栽培方法の改良や品質向上に努め、生産地としての宇治の名声を高めた。その頃、宇治川西岸は、平安時代の別業群の碁盤目街区から街道沿いに短冊状に町家が立ち並ぶ中世都市として再編が進んだ。この中世に形成されたまちの基本骨格が現在の宇治の基本構造として引き継がれている。中世以降、特に 16 世紀後半は茶文化が頂点を極めた華やかな時代であり、この頃の貴重な遺産により現在もお茶のまちとしての姿を伝える。

文禄３年（1594）の太閤堤の築堤により、宇治は古来よりの水陸交通の要衝としての重要性を低減させたが、近世に入ると幕府直轄の天領となり、町中には茶園が広がり天下一の茶どころとして高い名声を維持する。また近世後期になると宇治川周辺の寺社参詣や祭礼行事を集客に結びつけた様々な地域振興策がとられるようになり、観光名所であり茶どころである宇治は全国各地から人々が訪れるようになり、料亭や旅館が建ち並ぶもてなしの空間がつくられていく。

このように、歴史を積み重ねる中で生み出された宇治の歴史的風致は、都の近郊に位置する交通要衝の地、平安時代の別業都市、宇治茶を特産とする在郷町としての役割、名所・旧跡を有する遊覧の地としての発展など、時代に応じて変化する都市の重層的な歴史過程の蓄積として成り立っている。したがって、個々の歴史的風致の理解には宇治の歩んできた都市形成の変遷過程との関わりを知ることが不可欠である。

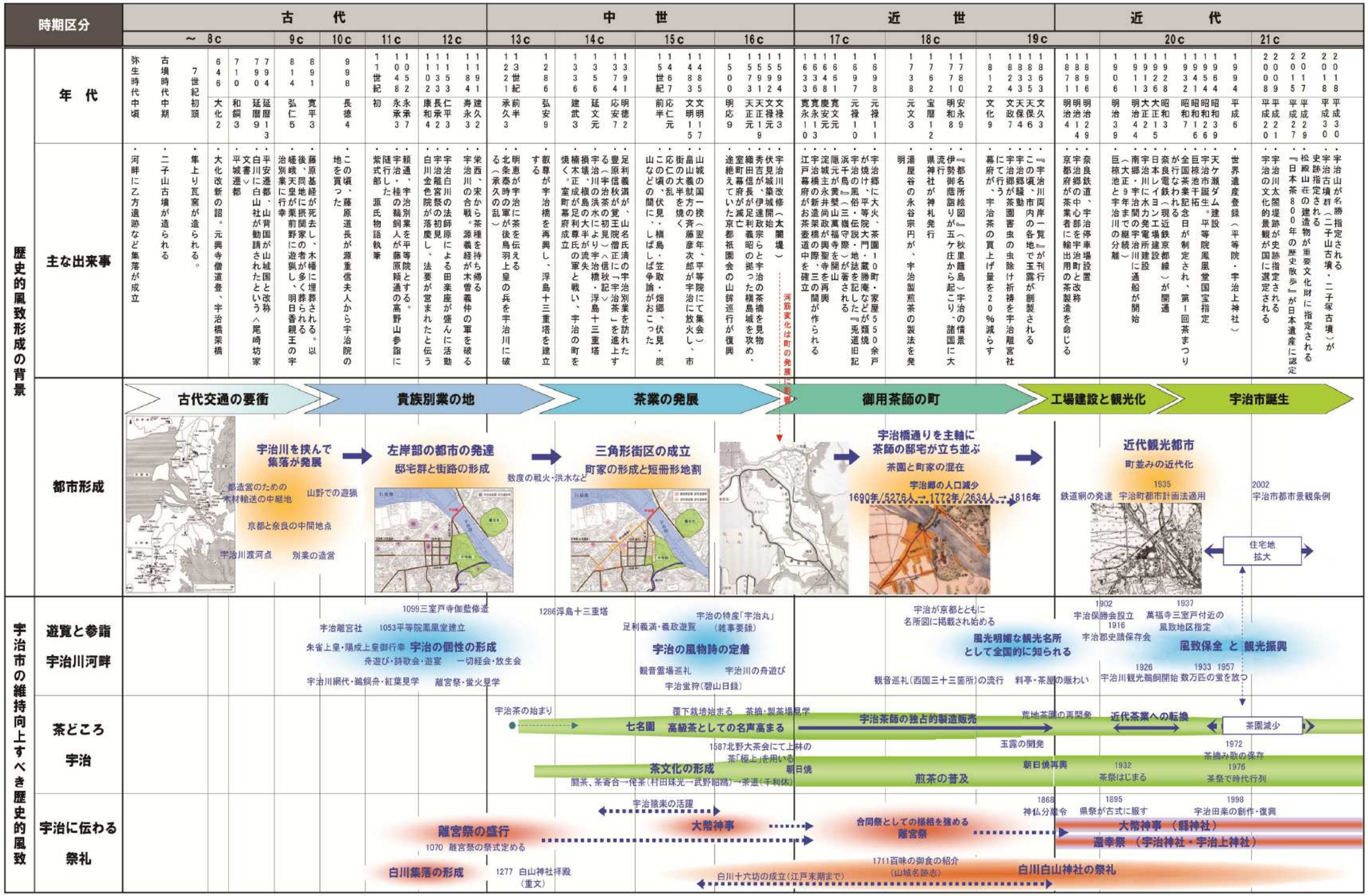



表２-１　宇治市の歴史的風致と都市形成の変遷